

西朋23

西朋登高会

西朋23

西朋登高会

— 目次 —

山行総覧	3
山行記録	
1985年度	7
1986年度	31
会務報告	51
西高ワングル部活動報告	53
随筆	55
甲斐駒ヶ岳戸台川双児沢滑落事故報告	57
西朋登高会会則	63

<<1985年度 山行総覧>>

山行 No.	期日	山 行 名	パーティ
8501	4/2~4	秋田駒ヶ岳~乳頭山	青谷、西入
8502	4/6	飯縄山	荻田、吉田、山田
8503	4/14	かぐらスキー場	吉田、山田
8504	4/29	広沢寺RCT	青谷、吉田、山田、武内、 相沢、上野
8505	5/2~6	鳥海山スキーツアー	青谷、吉田、西入、相沢
8506	5/4~5	尾白川~鋸岳(中退)	浜田
8507	5/12	丹沢 水無川本谷	浜田
8508	5/25~26	両神山 辺見ヶ岳	青谷 他1
8509	6/6~9	会津駒ヶ岳~燧ヶ岳	西入 他2
8510	6/15~16	越後駒ヶ岳	西入 他2
8511	6/23	広沢寺RCT	吉田
8512	7/6	和名倉沢支流米沢(中退)	青谷、山田 他1
8513	7/30~31	乗鞍山	西入
8514	8/2~6	白峰三山~蛭編岳	西入 他2
8515	8/2~27	Canada Mt. Edith Cavel Mt. Snow Dome Mt. Castleguard	青谷、遠藤、吉田
8516	8/13~21	夏合宿	
	12~18	八久和川本流~中俣沢左俣	河合、荻田、浜田、西入
	17	以東岳	相沢
	18	狐穴小屋	
	19	大朝日・aルンゼ	浜田、西入、相沢
	20	岩魚止沢	西入、相沢
8517	8/18	烏ヶ山~大山	山田 他2
8518	8/24	石鏡山	山田
8519	9/1	西朋祭 水根沢谷	青谷、吉田、山田、西入
8520	10/8	ヒツゴ-谷	西入 他1
8521	10/10~13	奥沢谷~笹ヶ岳	西入、上野、相沢
8522	10/15~16	戸隠山~乙妻山	西入 他3
8523	10/23	日光 奥白根山	荻田 他1
8524	11/2	日和田山RCT	西入 他1
8525	11/4	日光 女峰山	西入 他2
8526	11/17	丹沢 水無川本谷	西入 他3
8527	11/18	西上州 二子山	吉田、西入

山行 No.	期日	山 行 名	パーティ
8528	11/23	丹沢 大山	南波、林(春)、加藤、 飯塚、稲田、岩崎、長谷川 林(武)
8529	12/29~31	中央アルプス 小野川正股沢	青谷、遠藤
8530	1/1~2	甲斐駒ヶ岳 双児沢	吉田、浜田
	2	戸台川周辺	山田、上野
	3	仙丈岳	西入、加藤
8531	1/15	日和田山RCT	西入 他2
8532	3/8	神楽峰スキーツアー	荻田
8533	3/12~15	頸城 金山~焼山北面スキーツアー	山田、西入
8534	3/20~22	頸城 三田原山~火打山スキーツアー	西入 他2
8535	3/22	草津白根~香ヶ平スキーツアー	青谷 他

<<1986年度 山行総覧>>

山行 No.	期日	山 行 名	パーティ
8601	4/6~7	志賀 寺小屋峰スキーツアー	西入、加藤
8602	4/11~13	栗駒山スキーツアー	西入 他1
8603	4/29	日和田山RCT	山田、萩田、吉田、西入、 上野、相沢、斎藤、鈴木
8604	5/2~5	岩手山~松川温泉スキーツアー	青谷、中野、西入、上野、 斎藤、鈴木
	4~5	網張スキー場	中村、遠藤
8605	5/17~18	小常木谷	浜田、斎藤
8606	5/30~6/1	白山	西入 他1
8607	6/1	足尾 丹平治沢~ガレ沢下降	青谷 他1
8608	6/8	愛鷹山 位牌沢~割石沢下降	萩田、西入
8609	6/15	苗場山	西入 他2
8610	6/22	久渡沢ナメラ沢	中野、斎藤
8611	7/5	盆堀川桐葉窪	西入 他2
8612	7/12	野呂川扇沢敗退	西入、上野
8613	7/17~26	後志山 大雪 旭岳~トムラウシ 利尻山 斜里一ノ沢 羅臼岳	西入 他3
8614	8/1	雨飾山 荒菅沢右俣	西入 他2
8615	8/6	滝子沢右俣	青谷、斎藤
8616	8/11~16	胎内川本源沢	青谷、中野、浜田、西入、 斎藤、鈴木
	16~17	縦走	斎藤、鈴木
8617	8/24	奥多摩 水根沢谷	斎藤
8618	8/25	奥多摩 鷹ノ巣沢	斎藤
8619	8/30~31	西朋祭 氷川キャンプ場 海沢	
8620	10/5	谷川岳 ヒツゴー沢	山田、斎藤、鈴木
8621	10/10~12	恋ノ岐沢	河合、西入、上野、斎藤
8622	10/18	頸城 黒沢	西入
8623	10/19	妙義 桶木沢左俣	青谷
8624	10/25~26	南会津 セツヶ岳平滑沢	西入 他1
8625	11/15	丹沢 小草平ノ沢	西入 他1

山行 No.	期日	山 行 名	パーティ
8626	12/29~30	八ヶ岳河原木場沢	青谷、山田、斎藤
8627	12/31~1/4	北アルプス 燕岳	加藤、上野、鈴木
8628	1/2~4	蔵王 熊野岳	西入、河合
8629	2/12	御坂 四十八滝沢	青谷、上野、斎藤
8630	2/18	日和田山RCT	吉田、斎藤
8631	3/5	日和田山RCT	吉田、斎藤
8632	3/5~8	上州武尊山~武尊牧場スキーツアー	西入 他1
8633	3/8	根子岳スキーツアー	西入 他1
8634	3/14~15	会津磐梯山スキーツアー	青谷 他1

1985年度 山行記録

1985年度役員

会長	渡辺 喜仁
千-71-9-	青谷 知己
学生リ-9-	吉田 浩之
西高係	萩田 哲也
	西入 利雄
会計	浜田 知康
例会	浜田 和康
記録・会報	山田 裕久
装備	吉田 浩之

8501

秋田駒ヶ岳～乳頭山

- ・1985年4月2日～4日
- ・青谷知己、西入利雄

4月3日 くもりのち快晴

東北シリーズ第1弾。昨春細張から眺めた輝やく秋田駒にそこがれたのツアー計画である。夜行の八甲田から田沢湖線を経て、田沢湖スキー場に入る。リフトを3本乗り継いで出発。出だせばスキーでももぐる急斜面。まもなく尾根がヤセてくる。急激に天候が回復し荒々しい頂稜が望まれる。17、こう緊張して岩稜を超えると男岳の山頂である。反対側の噴火口が生々しい。男岳をすべり下り、女目岳を往復。夏白な雪原に我々だけのシュプールを掘く。といってもお互い未熟なためすぐ転ぶのは困りものだ。湯森山を経て笹森山まで、広大な尾根をたどるのほげう快だが、いさゝか疲れ、笹森山の山頂付近にテントを張る。

4月4日 くもりのち晴れ

夜半から風が強くなり、ヤッとの思いでテントをたたく。乳頭山との鞍部までは風が強く、スキーをひそめていく。ここより急斜面にシールをまかせて山頂直下まで。左側が切れ落ち

た山頂に慎重に登りついた。早蕨と石を拾ってすぐ退散。田代平山荘まで快適にぶつ飛ばす。小屋で小休後、界所の赤石を頼りに林間コースへ。くま、大雪にたまる頃、乳頭温泉郷の1つ、孫六温泉の裏手にすべり下りる。ここは入る、まやないというわけ、雪見の露天風呂と相成った。だから、東北の山スキーが好き。極楽の一方、盛岡にでてのあんこそばへの再挑戦、こちらは地獄。でした。

8505

鳥海山 スキーツアー

- ・ 1985年5月2日～6日
- ・ 青谷知己、西入利雄
吉田浩之、相澤善正

近年の西朋の山スキーゲームが高じて五日合宿も山スキーと化した。特に、東北の山は雪あり広大な斜面あり温泉ありでうってつけである。

5月3日

象潟—銚丘—御浜小屋(泊)

銚丘のバス停では、グレングスキーを持、た人もすいぶんいたが、こちらは適当な雪のところまで登ってシール登高。シールを借り忘れた相澤は遅れをとる。

ガスの中、ルートを失ないがちになりながらも強風の御浜小屋に到着。ここでの日本海に沈む夕陽と明るい月夜は一面の銀世界とマッチして幻想的であった。

5月4日

御浜小屋—七高山、新山—稲倉岳 蟻ノ戸渡方面—御浜小屋(泊)

クラストした雪面を鳥海本峰を目指す。石方に月山が大きい。干蛇谷に入るトラバースではスキーを担ぐ。そして強い日射の下、干蛇谷の喘登、帰路の豪

快な滑降に期待してしばらくの辛抱。

新山のコルにスキーをデポして七高山を往復。東面から登ってきた人もいて結構な賑わい。火山岩のゴロゴロする新山で日本海の広がりを見めたあと、コルでしばし昼寝。

そしてお待ちかねの干蛇谷滑降。汗を拭いたらせて登ってくる人達を横目に一気に滑り降りる。本当にアツという間に終わってしまう。青谷、吉田は飽きたらず、鳥越川源頭を更に100mほど滑り、ては登り返してくる。その後は稲倉岳方面へ、いい気分遊びに行く。蟻ノ戸渡手前の尾根からの鳥海山の沼は本当に立派だった。この夜は、鳥海山頂からその全容を望み、干蛇谷から眼下にその広がりを見るあたりにした。鳥越川の大滑降に思いを馳せて眠りにつく。

5月5日

御浜小屋—干蛇谷取付—鳥越川滑降—林道出合(湯)

いよいよハイライト、鳥越川の7km余の大滑降に入る。標高差1000m以上と地団を越すだけでもワクワクするほどで、実際期待通りに素晴らしい滑降だった。天気も雪質も我々に味方してくれた。干蛇谷からの取付はグツグツを果てまで滑り落ちて空身で滑って追いつくパターン。スキーのままならぬ相澤はツボ足とまじえての下り。しにかく

あれほどの爽快な下りは滅多にあるものではない。

最後は木立がでてきて雪もようやく終わり、用水路に出た林道の上こうで打ちまゐる。ちやうど雨も降、てきた。

5月6日

林道終点—水岡—象潟

雨の林道を水岡バス停へ。象潟で青谷は一足先に帰京、残りの三人は釈田見物。

8508

両神山 辺見ヶ岳
キワタ平ノ沢～滝ノ沢 下降

・1985年5月26日

・青谷知己 他1

ふたがみ荘のオヤジに動物の話などを聞いて日向大谷泊まり。翌朝平頂の沢登りと出かけた。オヤジは危いと言っていたが、飯野氏の「両神山」を参考にたかけた。キワタ平ノ沢は七滝の少し先で石崖から本沢に流入する小沢だが、途中地元の人が「逆丁橋」という大滝を有している。期待して行ったが傾斜がゆるく容易に直登できた。あとは何という事もなく辺見ヶ岳の両神山寄りのコルにトモ上げ、全く人気のない辺見ヶ岳山頂の岩峰は気持ちのよいところだ。ここより北に伸びる支尾根を少したどり右側に下りていくと滝ノ沢に下ることができる。途中10m前後のフメ滝をいくつがやりすぎすと、突然水流が奈落の底へ落ちていく。玉ダレの滝だ。30m前後おみごと。冬は氷結するところのこと。相棒はシャワーと感運いして頭から浴びて喜んでいいる。両神山周辺は冬よく氷結するが滝ノ沢は期待できそう。そもそも踏み跡があらわれて日向大谷下の腰越滝脇に出ることができた。

8509

会津駒ヶ岳～燧岳

- ・ 1985年6月6日～9日
- ・ 西入利雄 他2

会津初見参で燧まで残雪を縦走してきた。会津駒～中門岳の辺りはまだ雪もたっぷり残っていて、もう少し早ければ山スキーで十分楽しめそうだった。大杉岳ぐらいまではすべると白いものがあつた。燧でガスにやられたのは残念だったが、我々だけの会駒、中門の雲田気と見晴らしは最高だった。

駒、小屋跡、御池手前の水場。見晴らし十字路と幕営して三平峠から雨中を下山。会津駒や燧はやほりスキー登山がおもしろそうだった。会津の沢も機会をみつけて訪れてみたい。

8510

越後駒ヶ岳

- ・ 1985年6月15日～16日
- ・ 西入利雄 他2

先週に引き続き「駒ヶ岳」である。期するところあつて駒シリーズに意欲的にとりくんている。甲斐駒・不曾駒・会津駒・赤城駒・秋田駒・越後駒と片付け、あとはスキーで栗駒や海谷駒を企んでいる。

越後駒は駒の湯からの日帰り登高はなかなか辛かったが、豊富な残雪と展望に恵まれ、良い山であった。



8515

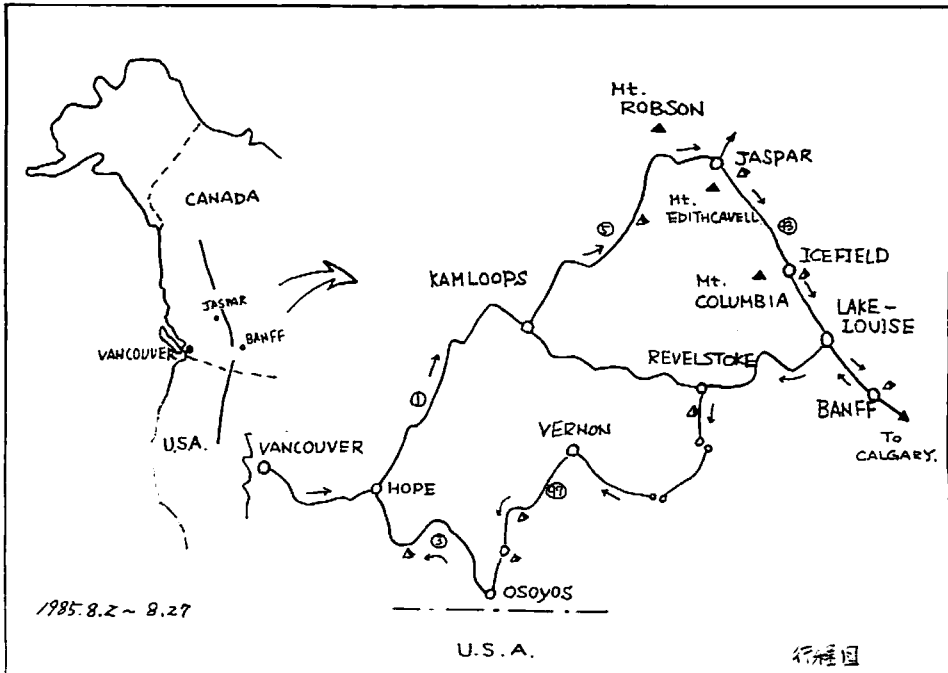
カナダの山旅

- ・1985年8月2日～26日
- ・青谷知己・吉田遠藤

海外へ行きたい。氷河を見たい。登りたいという思いがつのるうち、この夏は1人でもと計画をあたためていたが、2ヶ月前になつて吉田君が親を執事伏せて計画に加わり、更に遠藤さんも途中参加となつて、一考にカナディアンロッキー行きが固まつた。

目標は、氷河を存分に味わえるコロンビアアイスフィールド

周辺、特にカナディアンアルパインジョーナルの写真にひと目ぼれの Mt. COLUMBIA (3745m) をオーとして、その周辺のピーク、及び2・3の山々をピックアップして、約20日間に3つ登れば…というおおよかな計画で出発した。バンクーバーの兄宅を基点として、移動はレンタカー。宿泊はすべてキャンプという、いたつて気軽な山旅である。ジャスパーからバンフ周辺は観光地として有名なが、周辺の山々に目を転ずれば、魅惑的な鋭峰が連なっている。登山者は限られており、ハイウェイから一歩はいれば、野生動物の群れる大自然の只中に身をおくことが出来る。



◎ 活動記録

8/2 バンクーバー着. 兄宅へ
8/3 買物. 荷物整理等をして
過す。

8/4 バンクーバーからハイウ
エイをひたすらロッキーに向
けて飛ばし. 800km走ってハイ
ウェイ脇のキャンプ場にて
初キャンプ。

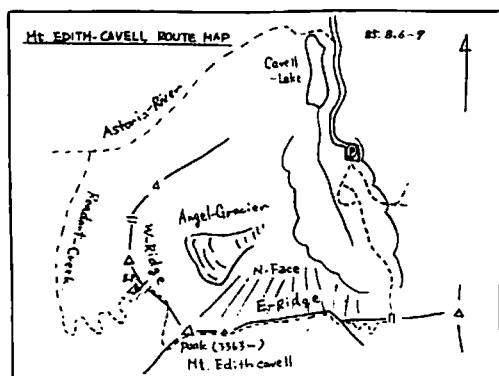
8/5 Mt. ROBSON を真近に見
てから. ジヤスパーのキャン
プ場へ。駐車スペース. テン
トサイト. かまど. マキは使
い放題. シャワー付と至れり
尽せりで. 8\$ / day. へたな
宿に泊まるより快適だ。町の
中心にあるビジターセンター
で地図を購入し. 登山届を出
して. Mt. Edithcavell のルート
についてアドバイスを受ける。
又. ジヤスパーのメインスト
リート沿いの山の店には. 以
前日本にいたという店員がい
て. カタエトの日本語でアド
バイスしてくれたのはありが
たかった。

④ Mt. Edithcavell (3363m)

ジヤスパーの町から望めるエ
ディスキャベル山。看護婦の名
前からとったというその名のと
おり. 見上げる姿は気高く美し
い。

8/6 晴れ

キャンプ場を後に. 早朝のハイ
ウェイを飛ばすと. シカが優
雅に横切る。Cavellロードをたど
るとトシールヘッドの駐車場に



着く。エンゼル氷河を抱えた北
壁が眼前にせり出て圧倒される。
トレッカー達を見送って. 我々
はモレーン沿いに踏み跡に入
って行く。重荷にあえいで休んで
いるとあちこちにモーマットが
遊んでいて心がなごむ。東のコ
ルには. 急な雪渓をダイレクト
に登りつめた。周囲は山また山。
又. これこそモレーン. U字谷
という地形が目新しい。ここ
からたどる東稜は. 下部がガラ
ガラのフェースで. 一見厳しそ
うだが階段状で容易である。か
なり長い登りを終わるとリッジ
状になる。高度感が出てくるが
容易な岩稜が続く。まもなく千
ムニ-状の岩場となり. サック
がつかえて登れず. ここよりサ
イルを出す。岩質はもろく気を
使う。少し地学的な説明をすれ
ば. この辺りの山は中生代の堆
積岩からなる褶曲山脈であり.
山肌の明瞭な横縞稜線はその表
れである。これを下から順にた
どるわけだから. 硬砂岩. 泥岩.
石灰岩とよまぐるしく岩質が変
化するというわけだ。花崗岩の

岩の硬さは残念ながら望めない。5P程たどると(Ⅱ~Ⅲ級)核中部。急なフェースに思わず吉田とジャンケンをするが負け。しかし登ると見た目程悪くなかった。2Pでココを抜け、更に続く岩核をザイルをひかずりつた。10Pぐらいかかったであろうか、ようやく頂上にたどりつく。つり尾根杖から小さなピークを越え果して十字架の立つ頂上であった。ここまでの実に長く例えれば前穂北尾根の3倍ぐらいのイメージであった。北面は北壁が切れ落ちて目もくらむばかりだ。とにかく握手。周囲は果てしなく広がる山並である。夕方7時を過ぎてようやく日が傾きだした。陽の長いカ

ラダではまだ行動を許してくれる。面後は容易な下降である。南の尾根からまわりこんでコルにてビバークとなる。

〈駐車場 7:35 - 東のコル 9:35~10:00

- 山頂 19:15~50 - B.P. 20:45〉

8/7 みぞれの曇り時々雨

起きるとうっすら雪が積もっている。早々に左手のガウガウの斜面を適当にかけ下りていく。モレーンの岩肩を越えると踏跡にでる。ナキウツギの音が響くカール産の清水で大休止。谷浴いのトレールをたどり、美しい針葉樹林帯を抜けて、ようやくキャベル湖についた。急に降りだした雨。エディスキャベルも厚い雲の中である。駐車場に車をとりに戻り、ジャスパーのキ



Mt. Edith-Cavell



キャンプ場へ向かった。

(B.P.7:25-カール湖8:50-9:30-キバベル湖
12:50)

8/8 ジヤスパーにて手紙を書いたりのんびりすごす。午後よりモレーンレイクヘッドライク。

8/9 バンクまで、あちこち寄りながら遠藤さんを迎えに行くと、2日遅れの連絡を受ける。コロンビア・アイスフィールドのキャンプ地に入る。

8/10 キャンプ地の裏山で散歩。目の前が観光名所ながら、ひと登りすれば別世界のアルペンメドウ。アイスフィールドをとりまく山々がすばらしい。それにもまして、太夫のひつじ (highhorn-sheep) の群れ。近づいても逃げず、にらめっこしながら寝そべってうとうとする。巻貝の化石をみつけたり有意義なひと時を過ごす。ワーデンオフィスに計画書の変更を伝え、観光客向けのスライドを見て戻る。

8/11 レイクルーズ経由でバンクへ。夜中の時過ぎやっと遠藤さんと合流する。アメリ

カ聖由の際びがなく、つかまっていたヒの事でした。

8/12 天気悪く昼まで寝坊。ミニドライブのあと、明日からの行動の準備。

⑤ COLUMBIA ICEFIELD

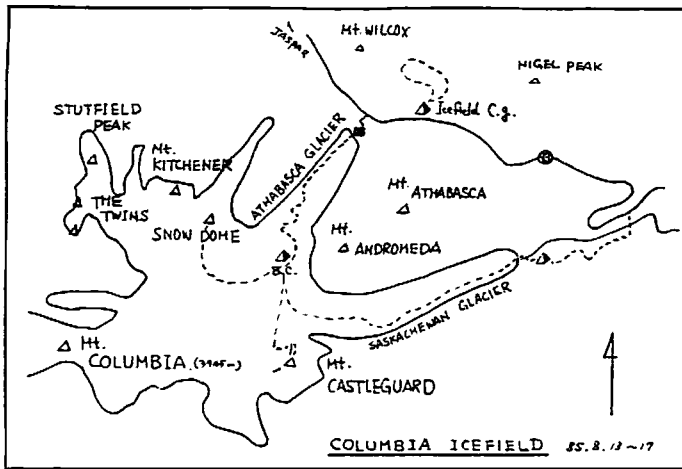
Mt. Castleguard (3083 m)

Mt. Snowdome (3460 m)

カナディアンロッキー、最大のコロンビア氷原。アサバスカ氷河を登りつめると広大な氷原が広がる。周回の山々は、山スキーに好適である。その盟主は Mt. Columbia (3745 m)。

8/13 快晴のちくもり

今回のメインイベント、Mt. コロンビアに会えると思うと胸が高なる。アサバスカ氷河平端の駐車場に車を置き、また誰もいない氷河の舌端に、アイゼン的一步を印す。快晴、そして足下に氷河、最高のスタートだ。スノードーム側を通過して1段・2段のアイスフォールを簡単にパスする。石側からの落氷に気を付けていけば、3段目のI-Fの斜面となる。ここで先行したカナダムガイドパーティーが、少し上で何か言っている。近づいてみると、ガイドがクレバスに落ちたという。幸いアンザイレンしており、協力して引きあげることができた。彼らはここで下山。そしてここからが問題であった。クレバスは雪にかくされて判然とせず、あいた口は暗国の裂け目。スタカットでト



つく。(後で考える
と山頂ではなく、肩
であったのではと疑
問には、たか定かて
はない)

< B.C. 9:50 → テポ 11:40
~12:40 → Peak 13:45 ~14:30
→ B.C. 17:05 >

8/15 風雪

アタックの体制で
あったが、停滞。

ツが空身で前進し、安全を確
かめて後続の2人が続くという
遅々たる歩み。胸をしめつけら
れる思いが続く。

迷路のようなクレバス帯を抜
け、ようやくスキーのはける安
全地帯に入るまで、4時間が経
過していた。平坦になった鞍部
にベースを設営する。コロンビ
アを見にスキーで散歩。雪原の
ふこうに遠く高く姿を現した。

(駐車場 7:00 → 1段目下 8:30~50 →
2段目上 10:20~50 → 3段目 11:30~12:30
→ スキー付 16:30~17:00 → B.C. 17:30)

8/14 くもり as みぞれ as 風雪

天気がほつりせず、Mt.
キャッスルガードをアタックす
る。大雪原にスキーを走らせる。
北の肩にスキーをテポレ。急な
雪後にはガイルを出すが見た目よ
り容易。この頃より風雪模様と
なり、頂上とおぼしきところ
に到達。写真をとって早々に退散
する。ホワイトアウトになり、
行きに立てた竹をさがしつつ、
やっとなの思いでベースにたどり

8/16 快晴

下山ルートを検討した結果、
アサバスカ氷河を下る気になら
ず、未知のサスカチワン氷河と
する。必然的に、コロンビアア
タックのためには、下山も含め
た3日間の晴天が必要で、時間
切れの可能性もある。というわ
けでコロンビアは涙をのんで断
念。スノードームに転向する。
ト快晴の中、空身でアタック。
大氷原の広大な斜面に我々だけ
の世界が広がる。高いコロン
ビアを背後に、ひたすら高み
を目指せば、その名の通りにスノ
ードームの頂上に立つ。周囲す
べてと言えし程の山々が見渡せ
すばらしいの一言。写真をと
ってはしゃぐ。ベースキャンプ
までの大斜面の滑降は今回のハ
イライト、思い思いにシユポー
ルを揃えた。ベースを撤収し、
スキーを付けてサスカチワン氷
河を滑降する。幸いなことにア
イスフオール帯はなく、中流ま
で滑降できた。表面に氷が露出

し、波打ってくる快適な走行も終了。転んだり、ついたりはずしたりしながらも8割方スキーの世話になって末端に到着した。モレーン地帯にカナダ人のキャンプがあり、その隣にテントを張る。

< B.C 6:45 → 頂上 9:55 ~ 10:35 → B.C.

11:40 ~ 13:20 → 末端 17:55 → B.P. 18:45 >

8/17 快晴

のんびりスタート。しばらくでトレールがほつきりし、ハイウェイに飛び出す。〇〇台目によくヒッチハイクできて、アイスフィールドまで車をとりに戻り、一路バンフへ向かった。

< B.P 11:00 → 駐車場 13:00 >

こうして実質的な登山活動は

終了。遠藤さんは様々な思い(?)を残してあわただしく19日早朝、帰国。青谷、吉田は、山の計画も雨で流れ、温泉や湖やワイン、果樹園などを巡るドライブをしながら、また別のカナダの旅を味わってきた。

我々が訪れた山々は日本人も何度が訪れている比較的ポピュラーな所である。しかし、カナダダイヤモンドロッキーは、予想をほろかに越えて広大であり、知られざる多くの山々が眠っている。

ここは、短期間で、海外遠征という響きを持って、自分たちの山のスタイルが実践できる貴重な場所だと思う。

— end: —



アリバスカ氷河の登高

8516

夏合宿 (ハズ和川(湖行)
etc)

- ・1985年8月13日～21日
- ・河合、萩田、浜田、
西入、相沢

今回の夏合宿はカフダの遠征と重なり、会員のスケジュールが折り合わず変則的なものとなった。そのため夜行で鶴岡の駅に降り立ったのは、河合、萩田、浜田の3人だけという寂しい始まりであった。

1日目

タクシーを降り、一息入れてから長い山行のオーパスを踏み出す。左岸についた草むしれする小道をズンズン進む。まず、この道でアブの洗礼をうける。進めば進むほどアブの数は増すようで先が思いやられた。ニ松沢まで踏跡は続いており茶な滑り出しである。沢を下降し出合の砂地で幕営とする。対岸に15m程の滝がかかり、快適なところであった。3人とも沢に飛び込み、泳ぎまくっていたが、水面に出た顔にまでアブにまされるので、疲れるまで水遊びをしていた。

2日目

本格的な沢のトレースがはじまる。5分もしないうちに膝まで濡れる砥目となる。朝一番で

水に入るのは本当に沢意がいろいろある。などと思いつつ、なるべくへつって行く。陽が高くなるにつれアブが出はじめ、沢相もきびしくなり二重苦となる。水流の多い沢のおもしろさの意味をいつつ、3人で思い思いにルートを選び進む。

横沢出合付近では泳ぎもきびしく何度もトライし、ようやくという場面もあった。途中、右岸上に踏跡があり、釣師の多さを思わせる。しかし、全般的に巻きは少なく、自分たちの力に合った楽しい一日であった。小国沢出合前のゴーロで泊まる。

3日目

あいかわらずの水量の多さである。減ってはいてもその分兩岸が狭り感じないのであろう。小国沢～戸立沢間は3人で巻こう、へつろう、泳ごうとワイワイやりながらの湖行となる。しかし、50m程の廊下(いわゆる自然プール)を見たとまにはもともと急傾きみの3人はもう嫌になっており、トライもせず「巻き」で息が合い、ホイホイと越えていく。ここからはアブと戦いながら、広河原のゴーロ歩きとなる。萩田・浜田は「チクシユー」「コノヤロー」「ガマーミロ今日はこれで20匹目だ」「エイ21匹目」などと顔を下向き尻を向き進む。幕営地、登山道出合につくと、ソリくごとテントにひきこもるが、中では、

3日間であまり、た蚊との格闘が待っていた。

4日目

天狗岳を越えて帰る列合れ・萩田を見送る。後で聞いた話によると、私はいつまでも手を振りつけていたようだ。昨夜合流するはずだった西入が来ないので小鱈沢手前まで偵察にでかける。帰りは泳いで下るが、2mの小滝上から飛び込んだときは水流にまきこまれなかなか浮かびあがれずヒヤヒヤものだった。

日頃は、こまにしていると、西入が疲れ切って登場する。気の毒ではあったが、チンドン屋の様は風体で笑いこぼしてしまっただけ。かなり余分に食料を持ってきたためデポ(?)するが「心えるワカメちゃん」までデポしたのは今になっても理由がわからない。

小鱈滝はS字の深い釜を持ち、水流も多く、暗い感じではあったが立派な滝だ。重荷のためおそるおそる右岸の外傾バンドを越す。すでに暗くなってきたので、この日は滝の100m程先で泊まる。

5日目

アでもヤ、といなくなり、ノンビリとした沢歩きでスタートする。沢が明るくなるとエズラ峰をバックに各滝が現われる。直径30mほどの円形の釜を持つ明るい滝だ。記念写真を取り、しばし休憩。

西俣沢出合でラン干とし、いよいよ中俣沢、上部核心部へと入る。急に水量が減り、滝登りとなる。まわりこみ10m滝は両岸が耳付でいやらしく、ここですべて泳ぐこととなる。さらに2、3回釜、瀬を泳ぎで越すと前方に20m程度の垂瀑が現われる。自信がなかったのあたりを見渡すと左岸のルンデに赤布がある。渡りに舟と登り出すが、これが大失敗。200mも登らされ沢身におりたときには濡れて重くなった荷物と、先の行程を見てしまったため急に意欲減退。さらに小滝を越えると崩れた下ロックが現われとどめを刺され、鼻管とする。

6日目

昨日、高巻きの際に見た谷の険しさを思いながらの不安なスタートとなる。5m程の滝を2本越した後、小滝にとりついたところで問題が起こった。私が体をズリ上げるのに苦勞していると、西入は右側の壁を登っていく。降りるのも面倒だと落口まで出て先を見ると干ムニー状に10m程の滝がかかっている。とても登れそうにないので巻こうとするが、右岸にルートが見えた。この時点で西入は私の10m程上におり合流するのが敷しかったので「後で会おう」といって結局、右岸と左岸に別れた行動となった。すぐに巻き終わると思ったが、私はカレに追

いとけられてしまい、引くに引けず、大声を出しあい沢が左に屈曲した地点で合流したが、1時間ほど別行動を取ることになった。

合流してからは明るい溪相となり、奥の二俣を迎える。左俣に入ると10m程の滝が7~8本続き、緑を白い線で2つに分けていた。巻いたり登ったりして越えていくうちにひょっこりと平地に出る。稜線が見える。足元にはひとまたぎできる程の干ヨロ干ヨロとした流れ。'終わった'という充足感とも日間の溯行の思いを胸に後ろを振り返り振り返り狐穴小屋へ向かう。

7日目

昨日合流した新人の相沢とともに大朝日岳へと向かう。北寒江山頂でハ久和川の長大で深い谷を目に焼きつける。結構苦しんだ溯行ではあったが思い出すのは楽しかったことばかりだ。変なものだ。金玉水にテントを張る。朝日川黒俣沢を下る。バルンゼが目的であったが、一本沢を教え違え、バルンゼをそれと誤り、'まっとう落石で埋ったのだ'と勝手に解釈し、うらめしくゴーフの小沢を見上げる。幸い出合に30m程の岩があったので、西入と相沢を取付かせ、私は下で笑いながらの観戦とし、その日は終わった。

8日目

沢田は下山。西入、相沢は荒

川東俣沢岩魚止沢へと向かう。
(沢田・記)

8520

谷川・ヒツゴー沢

○1985・10・7~8

・西入・他1

谷川の沢はまだ訪れたことがなかったの、折から紅葉の時期でもあるし、大学の山仲間と入門的なヒツゴー沢へ行ってみた。

二股についたころは雨が降り出し、中ゴーフ尾根に変えようかと思ったが、大したこともないと判断し溯行を開始する。

さすが名溪といわれるだけあって溪相がよく、水が冷たいものの次第に雨にぬれた紅葉もすばらしくなり、快適にすすむ。

しかし出発が遅かったためとのんびりしたため、暴風雨の国境稜線に出たときはほぼ夕方。足袋のまま暗くなった西黒尾根をかけ下り、土合でやっと一息ついた。

水ヒ720-740谷川温泉-850
二股一出合1000-1350ゴルフ終了-
1530稜線-1605谷川岳頂上-1930土合

8521

雨・奥沢岳一笠ヶ岳

- ・1985・10・10~13
- ・西入利雄・相澤善正
上野午良

10月10日 晴れ一くもり

朝新宿を発ち、身延からバスで馬場へ。そこからしばらく林道を歩き河原に降りた所で昼食。わらじに履き替える。しばらくはゴートの河原が続くが突然15m程の滝。ザイルを使いクリア。その後すぐに左に折れ、2m程へつり気が抜けない。その後も小さな滝を越していくが、吊橋が現れたところで休憩。その奥にエン堤が見えたので一度高まって手に本流に戻る。次に5m程の滝が現れたが、堰のようになっており、取り付き口が見つからない。やむなく、少し戻って上部をへつる。そろそろ夕闇もせまり、あせりだしたとき、奥の方で20m大滝が待ちかまえていた。左岸が取り付くそうだが、かなり厳しいものがありそう。高巻きを試し、ガレを登っていく。懸垂で本流に戻った所で幕営。流れが折れている所で絶好の砂地であった。

馬場1055-1135 奥沢谷入口1215-1430 吊橋-1655 小谷出合手前

10月11日 雨一くもり

出発時から雨が降り出す。沢登りも早々に予りあげて尾根道を歩く。布引山に着いた頃には雨もやんでいた。そこで、相澤と上野が所ノ沢越まで水を汲みにいくが、途中の二重山袂で迷い、かなりの時間を要してしまう。急いで水を汲み、日が暮れるまでにその二重山袂で通過しもう少しで布引山という所で日が暮れてしまった。山頂直下で西入先輩と、隣りのテントの方2・3人と出くわし、串なまきを得たが、不覚な迷惑をかけてしまった。布引山から青森山方面の道は2年前と同じ状態だった。

起400-麓608-635 登山道-700 広河原-1215 松横手山-1415 縦走路-1445 布引山(所ノ沢越ピストン)

10月12日 晴

空気が澄みわたり富士山がよく見える。1P程で笠の頂上に行く。他のパーティーが2・3いて少々喫でめ。相澤がつくって来たアレートをそのらの木にくくりつける。尾根道を快適にとぼす。途中で荒川三山のどろしりとした山容が目に入り、しばし休憩。昼食は生不割で。木々に囲まれた静かな山頂。ここでも相澤のアレートが登場。軒付峠についたのは3:30。少し下った水場の前で幕営。

起500-麓700-755 笠ヶ岳905-1130 生不割1300-1440 林道-1520 軒付峠

10月13日 雨一晴

昨夜からの雨がまだ、それほど降っている。今日はひたすら下るのみ。バス停に着いたら雨は上がっていた。

今回の山行は沢よりも尾根歩きの方がインパクトが強いものだ。してみれば、2年前の37期にとっての復讐戦といえようか。

起600—麓820—1000発電所—1050
田代入口1150—1300身延



8522

戸隠山～高峯・乙妻山

- ・1985・10・15-16
- ・西入利雄 他3

ちょうど紅葉の頃に戸隠から乙妻までの縦走。天気も良く、全く人に会わない味わい深い山行だった。惜しむらくは西兵・本院岳を割愛せざるを得なかったこと。西朋メンバーがそろえば充実した内容になったであろう。

ともあれ、紅葉と展望が絶品であり、とりわけ9月に登りそこな下(高谷池と雨天敗退)火打・妙高がすくみえ、再訪の決意を新たにしたい。

8526

水無川本谷

- ・1985・11・17
- ・西入利雄 他3

どういう訳か、冊沢の沢はこれが初めてである。今回は初心者2名を連れていったため、水無川の本谷になったが、印象はあまりパツとしなかった。溪相はちよつと開けていて粗い感じ。アムヤヘツリがないせいだろうか。

西朋では冊沢は意外少ないので、西冊沢や道志の方に人跡未踏の沢を探してみるのもおもしろいかもしれない。



8528

西明OB有志の大山参り

- ・1985年11月23日
- ・(2期) 南波, 林(春), (5期)
加藤 (6期) 飯塚, 稲田, 岩崎
長谷川, 林(武), ゲスト 細村
- ・(コース) 大森野一ヤビツ峠一
大山一下社一伊弉原

雨天決行とはいっても、参加者が何人になるか、心配しながら床につく。

朝はどうやら雨が止んでいる。しかし、何時降り出すものが心配しながら新宿駅小田急改札口に行く。飯塚、長谷川、そして参加できないと云っていた稲田も現れた。林(春)が来たところでお発。

大森野駅で降りると、加藤1人が待っている。同じ電車で、不参加と思っていた、南波が下りてきた。更に岩崎、細村が合流した。バスが出てしまったので、タクシーに分乗してヤビツ峠へむかう。約30年ぶりのヤビツ峠なので、小屋や駐車場が出来て全く変貌した様子にただ驚く。

雲が早い。どうやら好転のきざしが見える。誰もが何年もしくは何十年振りの山歩きで、先行きを心配して口だけが大変に活動している。ノンビリ歩き出す。面の方が晴れてきて大変

眺望がよい。強い風が汗ばんだ身体に心地よい。最後の登りはまっく、間隔も大きく離れてしまった。心配したようなトラブルもなく、全員無事に頂上に立ってホッとした。

雲ひとつ無くなり、360°の眺望が舞しめ、江ノ島もかすんで見える。しかし、人の多いのには参る。落ちついて腰を下ろす場所もない位だ。直ちに下社に向かって下り始める。「上りはよいよい、下りはこわい」。前夜の雨で滑りやすい。滑って骨折でもしたら、いい笑いものになってしまう。慎重にマイペースで下る。途中空腹のために握り飯をパクつく者もいる。(突如林(武)膝がガクガクして泣きごとなが盛んになった頃、やっと見晴台に到着し、どうやら急降下も終わった。人も多いし、腹も減ったので、休憩することなく下社へむかう。参拝は石段の下から済まして、目的の豆腐料理へぐ。具合よく空いた店が一発で見つかり上り込む。豆腐料理を賞味しながら、全員無事に下山出来た事を喜び、更に昔話しに花が咲き、大変楽しい一時だった。

店から少し下ると、何と12期の根内が家族連れでいるのにバツタリ出会った。全くの奇偶だ。(奇偶といえ、私は帰路、吉祥寺駅で子連れの12期小川に出会った。) 又の両会を約して伊弉原駅で解散した。

(林(武)記)



8529

中ア・小野川正股沢

・1985年・12月29-31日
・遠藤 彰・青谷知己

正月は学生連中が南下へ、それでは社会人は年末のうちどこかへ、ということ記録を見て気になっていた正股沢を選んだ。

12/29 くもり

上松よりタクシーでキャンプ場の少し先まで入ってもらう。表草岳が高く望まれる。正股沢の出合らしきところからゴロ杖を進むが、けっこうのアルバイトとなる。最初の穴状滝は一部しか氷ってない。けっこう雪が多く、ふみぬきに注意してたどって行く。10m程の2つの滝は左右の氷の張った部分から何ということもなく越える。ゴルジュ状になり、下はラッセルとなる。溝状の氷瀑は落口近くで穴があいており、ザイルを使って越える。行手に入滝の青氷が立ちほだかり、今日の行動を打切る。

12/30 くもり a5 丹ざれ

しばらくラッセルして行くと10m程の垂直気味の氷瀑を従えて大滝となる。遠藤さんが取付手で先行する。両岸が高くせり上がり気が引き締まる。空身になり左下より右上して弱点をた

どって行く。最後の7m程は特に急傾斜で根本にスターゲをぼちりきめて取付くが落口の氷がうすく冷汗をかく。遠藤さんはフルージックで後続する。この先雪が多くかばりのラッセルとなる。二股から滝は埋まっており、随一の青い幅広の氷瀑は遠藤さんトッポで右側を越える。ゴルジュとなるが氷瀑はほとんど見られない。いよいよラッセルがひどくなつたので早めに右岸の支尾根に取付くが、いこうにはかどらない。そして何と雨。ズブ濡れになり悲惨な状況でテントをひる。

12/31 晴れ

とにかく尾根手で、とズボツズボツと踏み抜く雪を進んでいくと、1時間程で道に出る。表草から駒を越えて宝剣手で、という計画は放棄。そそくさと下りるが、最悪の雪質に悪戦苦闘。ようやく雪がへってかけ下れるようになる。奇美世の滝の前に出た。氷結は不完全だが、見事な氷の殿堂になっている。

あとは黙々と道をたどり、上松間近で車にのせてもらい駅に出た。この悪天のためか、この時期中アの遭難事故が続出した事を知る。加えて西朋もとは……残念(後述)。

8533

金山～焼山北面スキーツアー

・1986・3・12～15
・山田裕ス・西入利雄

3月12日 晴れ

去年の5月に妙高から雨飾山まで縦走したことはあったが、再び雨飾にひかれ、さらに焼山北面をすべろうと今回山スキーで入山した。

中上からのバスの車掌さんに一昨日、昨日と雨で雪がゆるんでいるから雨飾はよしたほうが良いと言われ、計画をアテ立尾根から金山、そして焼山とする。雨飾はまたの機会に南稜を登ることにしてあきらめる。

笹ヶ峰への分岐にタイトするが、時間が早いので大滝山でも行こうかと出発するが、湯峠前で面倒になって帰る。ながめる大滝山は非常に立派な山であった。

田中下745—835 小谷池905—935分岐
1020—1120 鑛池の上1210—1240

3月13日 晴れ時々くもり

アテ立の尾根の取付手が林道をしぼらく進んだ1228mであることを知っていたが林道にのった雪が不安定そうで怖く、2.5万回上の夏道に行くまでにもテブリアが出ているようであったので960mの橋から出ている尾根を登る。ところが登るうちに尾

根は予想外に細くなり雪の付手方も不安定になってくる。もう少しで夏道の尾根とあわせるという所で尾根上は岩ではぼまれ岩溝の中を登らなくてはならなくなってしまうので引き返すことにする。テブリアを横切って夏道の尾根に取付く。2時間余りのロス。その後も所々細い所があったが快調に進む。天気はくずれてきたようだ。1949mがケ下でタイト。

1 545—805・1150m(引き返す) 820—930・1200m・955—1355・1949mケ下

3月14日 くもり

今日は風が吹いているが見通しはよくすく。金山までは快調に進む。金山を出発するあたりから視界も悪くなって来、裏金山をすぎるときには雪庇と空の境が判然としなくなってくる。地図とコンパスをたよりに進むが南側の雪庇が怖い。その上、何度か雪穴にはまってしまう。富士見峠について粕谷をアテすがよくわからない。明日もあまり天気がよくなさそうなので今日のうちにめどをつけておきたいと北面にすべり込む。焼山を回り込むと視界も開け、すべる北面台地がみわたせる。これ幸いとはばかりに北面にすべり込み、少し固めの雪をまたみしなからも1500m付近にタイト。少し登って滑降写真をとりあつたりする。

2 600—805金山 825—955富士見峠1010—1110焼山北面(2050m) 1150—1210・1500m

3月15日 晴れ

どういふわけか晴れている。
やったとばかりすべり出すが、
昨夜気温が高かったせいか、朝
も早いというのに完全に雪が腐
っている。重い荷物に重い雪。
暑い日射しにはてはてになつて
笹倉温泉にたどりつく。ゆっく
りと温泉につかり、4月からと
いうのになぜか開通していたバ
スにのって糸魚川へと向かった。
約700—805池坪815—1000笹倉温泉

今回は山行中1人の登山者にも
会わず、たれのシュプールも
追うこともなく静かな山行がで
きたとても満足であった。



焼山北面にて

8534

頸城・三田原山～火打山
スキーツアー

- ・1986.3.20～22
- ・西入利雄 他2

先週の木狗原山～焼山北面に引手籠っていたにもや春の頸城にシュプールを描いてきた。

3月21日

飛び石連休ということで多くのパーティーが入っており、こちらは山スキー初心者2人を連れて、トレースをマイペースで進む。晴天の下、大汗をかいてやっとのことで妙高の外輪山裾に出る。吹手抜ける風と展望でやっと元気を取り戻し、三田原山から黒沢地までひとすべり。眩しい夕日を浴びながら、真白な火打に胸をおぼらせて高谷池ヒュッテへ。開放されている三

はスキーツアーのパーティーでなかなかの賑わいだ。

く1777終点1000-1515三田原山1540-1730高谷池ヒュッテ(泊)

3月22日

期待のハレ一懸星は確認できなかったが、心地よい朝陽の中、軽快に火打へ向かう。他のパーティーは焼山方面へ縦走するものが多いうのだが、こちらは空身で写真撮りまくりながら広大な白い斜面をいく。

念願の頂上は、先日トレースしたばかりの木狗原から金山、

焼山から日本海へ連なる北面、ごつい海部山塊、見慣れた北ア連山、果ては上越やハッポでぐるりと見廻すことができ、思わず長居をしてしまった。

そして極め付けはやはり火打頂上から高谷池への爽快な滑降。重めの雪で華麗とまではいかないが、各自気持ちよくシュプールを刻み、一気に高度をおとす。

帰路は三田原山まで登り返してから、池の峰へ派生する尾根の東側の斜面をおりる。ブナ林の中をゆうように雪みれになって滑り、いいかげん足がガクガクになる頃、世が峰牧場への林道にとび出した。

(起430-麓630-800火打頂上915-1035
高谷池ヒュッテ1155-1420・2300mヒュッテ前1505
-1635林道-1715木の沢に2停)

8535

草津白根～若ヶ平ツアー

- ・1986.3.22
- ・青谷知己 他6

ケレンデ組も従えてワイワイとツアーに出かけた。白根火山の脇をすりぬけて若ヶ平まで。実にそう快、一部火山灰が露出している。若ヶ平は静かな別天地、ここからは天狗ケレンデまで間違えることのない切開きが導いてくれる。おすすめな半日コース(ケレンデ可)。

1986年度 山行記録

1986年度役員

会長	山野 裕
4-7リ-ダ-	青谷 知己
学生リダ-	西入 利雄
西高係	萩田 哲也
	上野 午良
	相沢 善正
会計	渡辺 喜仁
	中村 正俊
例会	齊藤 大助
記録 全般	山田 裕久
	鈴木 学
装備	西入 利雄

8602

栗駒山スキーツアー

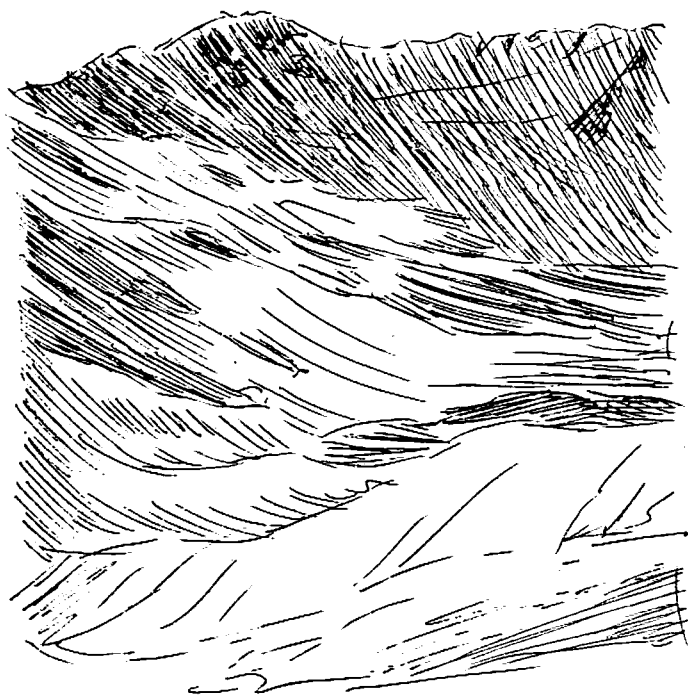
- ・ 4月12日～13日
- ・ 西入利雄 他1名

電車、タクシーを延々7時間めまり乗り継いで「いんいの村」に着いた時は吹雪もよる。それでも、約一時間の苦しい登高をや、とのこと雪に半分埋ま、に避難小屋にもぐりこんで暮営する。

一転して快晴の下、勇んで真白な栗駒へ向かう。適度にクウストした夏道と1ロッケ余。そこから頂上直下の大斜面を一登りで頂上へ。ちょうどが入がむで、東北の山なみと見ることはできなかつたが、暮営したいわがみ平への雄大な入ロープに胸を躍らせる。頂上からの滑降は、空身の所為か雪質の所為か、この上なく快適だった。どうも楽しく滑って下るといわんばかりの、なだらかで無立木(下の方にはややフッシュがあるが)の斜面が広がり、思うままに滑り降りる。

のんびり撤収して、いんいの村までもう一滑りし、タクシー待ちの間に温泉につか、て大満足でひまあげた。

(西入・記)



8606

白山スキーツアー

- ・ 5月30日～6月1日
- ・ 西入利雄 他1名

今シーズンの山スキーを締めくくべく加賀・白山へ行ってきた。有終の美を飾るにふさわしい、なかなか充実した滑降が楽しめた。

5月30日

金沢-白峰-別当出合
-基ノ助ヒュッテ(泊)

別当出合まで入っているはずのバスが道路通行止で白峰までしか行かず、初夏の日差しの下、スキーを担いで20km余の林道歩道をさせられるところだ、だが、1Pほど歩いた所で工事用車両に乗、けてもらい大いに助かる。結局、これがなければ、時間的に白山登頂はもとい、まともなスキー滑降はできなかつたはず。感謝。

砂防新道に入、て林道と別れるあたりからようやく雪がこぼれてくる。別山と右目に樹林の中をシール登高2時間弱で基ノ助ヒュッテへ。小屋内にテントを張り、明日に思いを馳せる。

6月1日

白山ロストン-白峰-

金沢

明け方の雲が残る中、黒ボコ岩へ急登。意外に寒い。広大な真白い雪田と本峰や別山の眺めと楽しみながら進む。まだ2-3mの雪に埋もれた室堂小屋を横目に嘆息。直下でスキーをはずし、岩礫を踏んで頂上へ。生憎期待した大パノラマは望めなかつた。

テボ地まで戻り、いよいよクライマックスの滑降を開始する。彌陀か原まではかすが多少残、ていたが、そんなことはどうでもいいほど快適な大斜面の滑降。雪質も良く、歓声と上げながら思い思いのシェパードを描く。青空も広がりだし、気分は最高。黒ボコ岩は右から急斜面をまわりこみ、別山に向けて雪煙を飛ばす。途中で出合、たパーティーが、スキーでフツ飛んでくる我々を見て目を丸くしていた。

ヒュッテからは残雪を越えよう、ように林道の上まで。もう夏の暑さで、別当出合に戻、た時はびっくりかえ、てしまった。本来ならここを山行終了のはずだが、まだ例の林道歩まが待、ている。しかし、まにもや何と言う幸運か、1Pほど進んだ所で車に乗せて頂、アツという間に白峰のバス停まで運ばれてしまった。おかげで温泉でや、くり汗を流すことができ、夕方は金沢見物と相成、た。(西入記)

8607

足尾・丹平治沢
～ ガレ沢

- ・ 6月1日
- ・ 青谷知乙 他1名

足尾は意外に知られていないが、野生動物の豊庫だ。シカ、カモシカはもうろみ、時には、サル、ツキノワクマも、見るこじがでまる。狩に製練所の上流、阿蘇沢や久蔵沢流域は、鉾密で荒れた山肌が逆に見通しを良くしておろし、必ずと言っていい程、これらの動物が姿を見せてくれるところだ。動物観察を目あてに仲間と出かけたが、陽気もいいので、そのうちのN女史と抜け出して沢登りをやってみるといふわけである。

ジャンタルムと左に見て、林道としぼらく行くと、右側から丹平治沢が流水込んでくる。すぐ滝場が望まれる。ここで身任たくもしく沢に入る。最初の2つの滝は快適にパス。20m程の滝は左手の水線沿いに直登。ザイルを出さなくて緊張する。しぼらくコアロをとるとヒョウタリの滝。右手のスラブ壁をザイルを出してはい上がり、一担ゼレー。バンドから落口へ抜けるが、細かくて思い切りが必要だ。N女史「私にと、ては快拳に

ア」と言、て喜んでいゝ。また平凡な沢相になり、周囲に緑が多くな、てくる頃、意外にも左手の庄倒的な壁より大滝50mが水しぶきをあげて落ちてくる。右手の細流から回り込んで1P。トヨ杖の上部は右手のかぶった壁をボルタリング的にひと頑張りすると傾斜が落ちて落口になる。爽快。あとは問題なし。源頭は大平山南面に大きく広がるササ原帯にな、ている。途中カモシカのバウバウ部品と見て近くにクマがいるのでは？と、ソツとしたりしたが、見事なけもの道を見つけたら、自然と松木尾根の方向へ導かれる。しかし安心したのもつかぬま、突然の霧に方向を見失い、カモシカの鳴声を逸っかけてヤセ尾根を下るとガレ沢の源流帯に下りついた。ここは下、てしまえ、というこじで Let's go。名とは裏腹に、ナメ滝が連続して美しく、もうけ物という感じであった。

出合付近は工事しており、車道をかけ下、ていくと、仲間が迎えに来てくれていた。

8609
苗場山

- ・ 6月14日～15日
- ・ 西入利雄 他2名

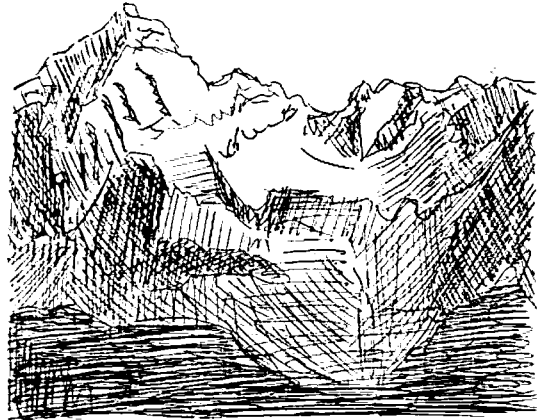
昨年2月、初の山スキーで神楽峰まではいっていたので今回は、あのほかでかく鎮座していた苗場本峰まで足元のほして来た。

6月も半ばだというのに、和田小屋と朝霧つと向もたく雪がでてくる。神楽峰のあたりは立派に山スキーが出来るほど豊富な残雪で、晴天ほまぶしい。

色とりどりの花が咲く中を本峰へ端登すると、ひょ、こりとほか広い山頂湿原（とはいっても半分雪に埋も、ている）にでた。噂にはまいていたが、本当に、“頂上に尾瀬がある”感じ。谷川方面がよくみえた。のんびりと雪原を散策してから下山。もう日射しは夏っぽい。中腹のフナ林の緑がきれいだった。

今回は日程やメンバーの都合で扱川から往復になったがやはり赤湯方面や小松原湿原の方まで行、てみたにいいだ。

(西入・記)



北總高岳

8614

雨飾 荒菅沢 石保

- ・ 8月1日
- ・ 西入利雄 他2名

サークルの連中が雨飾に登るといふので、クラシックに荒菅沢をつめてフトンボシと肉近にながめ、頂上直下で合流しようと思つた。沢筋は雪渓もほどよく残つていて、急斜面も快調につめるが、真夏の暑さにやられた訳ではないのだが、右のスウズに入りこんでしまった。地図もたえずに好きなように進んだし、ペ返しである。さすがに途中で気がいたがどうにかなると思ひ、アンザイレンしてスウズ帯を直上していった。そして上部の樹林の小尾根にとりつかせ、40分あまりの名にしゆり越後の猛ヤアとの悪戦苦闘が始まった。ふだん西朋で鍛えられている私にとって、ちょっとめんどうな程度だったが、連れは暑さも手伝つてバテバテである。しゃにんに枝をつかんで急登し、やと笹平の一部の平原にでては、とした。愛鷹の手痛い失敗を愚かしくもまた再現してしまつたのだ。た。

(西入・記)

8611

盆塚川 桐葉窪

- ・ 7月5日
- ・ 西入利雄 他3名

大学の山仲間には沢登りの味を覚えさせてしまい、今日はあまり行かない近場で短いところに行こうというこゝとで、沢川水系にした。あいにく小雨で、沢も風雪害のためか倒木が多くていままが肉口した。意外と手はずる滝もあるというが、流木のためかそれほどでもなく、約1時間で二股。やはり物足りない感は否めない。時間的に余裕をもたせて奥の手が沢石え窪もやつてみたが、た。

8616

飯豊・胎内川・
東俣沢・本源沢

・ 8月12日～15日
・ 青谷, 浜田, 西入, 中野,
鈴木, 奇藤

今年の夏合宿は、「次は飯豊」という雰囲気のもと、すんなり飯豊の沢と決まった。その中では、新人連れて比較的可なりめであろうと考える、胎内川周辺と選定した。最初、大人数でもあり、2本の沢に入る予定であったが、最終的に本流一本となった。

8月12日 -くもり-

胎内ヒュッテ 7:50 -

樋ノ木沢出合 9:50 -

浦島土 13:30~50 - B.P 16:00

夜行で中条下車、予約して泊いたタクシーに乗り込み。途中、野猿が道に廊れて、目と楽しませてくれた。胎内ヒュッテで飯を食い、様子を開いてスタート。小屋の裏手の本流をほだしで横断し、アヤマイノカッテに至る尾根をたどる。大汗してロークに至る。ここより適当な踏跡をたどり、くぼ地をま、すぐ下、ていくと、おぼやかな樋ノ木沢の流れに出ることができた。ここよりはまかえて、いよいよ飯豊の沢に分け入、ていく。本

流出合までは特に困難もなく、最後の滝を右手よりまいていくと本流に下り立つ。水はビュビュと流れ、最初からザイルを出して水線際と進むことになる。しかし見た目よりも悪くなる簡単にパス。あとは、やや平凡な流れとなり、ジャブジャブ楽しくたど、ていく。途中、1ヶ所大きな壺になり、これは、青谷トツテで泳いで右岸へ渡り、左岸へ飛びつく。後続はザイルに引かれてメカフカというやつである。スノーブリッジのかかる悪相の作四郎沢と分けると、ニセ浦島。腰ぐらゐのアルジュンが特に困難はない。そしてその先の浦島。薬研沢出合より、直線で100m程のみぞと廊下である。腰上ぐらゐの廊下一林の水流と、ぐんぐん歩いていくことになる。他の山域ではみられない、飯豊ならではの雰囲気がある。まもなく雪片がぶかぶか。案の定、不安定なスノーブリッジがかかる。まだ中流である。イヤな感じがたたり。左岸より高巻き、懸垂で本流へ下る。平凡な、しかし水量の多い河原をしぼらくたどり、滝沢出合下と泊まり場とする。

8月13日 -晴-

B.P 6:30 - 二股 8:50 -

えんてい滝上 13:00 -

一の沢上 15:25 - 直

18:40 - B.P 20:35

朝一の水は冷たい。小まな
廊下と扱けり。団子河原と
なるが、某の定雪渓があらわれ、
何度か高巻きをしられる。
二股手前では、大きく巻
いてスノー帯とトラバース、
枝沢に出で懸垂で下る。西俣
沢との出合いは殆どやかに光
り輝いている。東俣沢に入ると
水量は半減するが途端に緊
迫感が漂う。狭いゴルジュも
もうに水流をあげて突破、(新
人の鈴木君が先使をつけた
のは表彰もの) その先の急
め滝は快適に左壁を直登。し
ほらくは、滝が連続し、岩も
固く快適な沢登りとなる。と
思うもつかのま、スノーブリ
ッジ。2つ程こわごわ走り扱
ければ、えんてい滝である。
釜を泳いで右側のクランクよ
り越えるのだがいやらしく、
西入バトツプで取付くも荷物
のためかスリッパ。軽い襦袢。
青谷もかぶりびび、て何と
かサイルを張る。全員をあげ
少し行、て昼食とする。行手
は又しても、雪渓。先の見通
し立たず。大高巻きに入る。
下の絶望的な沢筋を見ながら
2時間、一の沢手前まで巻く。
一の沢は強烈に切れ落ちてお
り、本流は大きな雪渓。前方

は途切れ途切れであり、下降か
どうか大いに迷った末、最悪の
場合は登り返すこと。Let's go
となる。30mの懸垂。おり立
た所は、雪でふたとされた釜の
底のような所である。これとく
ぐ、ていくと、大釜となる。西
入が先行。一度は流されたから
も果敢に泳ぎザイルを張る。後
続の荷物と人間をロストに輸
送。いまにもこわれそうなる雪
下では気が気ではない。更に
腰までの水流を扱け、泳ぎのタ
フル。す、かりちがみあがる。
シの先で直瀑と雪となり、アウ
ト。高巻きである。一見階段状
と、青谷トツプで、すぐ下の左
壁を登、てみるが、行まがまる。
時間切れも近く、ままた、この
ゴルジュ内のロバークかと覚悟
と決めようかという時、ままた
天の恵みか(全くそんな心境)
中野が少し下の岩場に可能な高
巻きルートを見つけて出す。懐電
をつけ、サイルを付けと……、
全員がどつにか身のおける草付
にははいあがりたのは、八時と過
ぎていた。あたにかい草の感触
にや、と気持ちが解放される。
適当なところで各自ローレして
ロバークとなる。

8月14日

スタートは高巻きニ、沢出合
まで水平にたどり、本流の雪
下で偵察してみるが、この
先の連瀑帯の見通しが立たず、
ニの沢手前の大高巻きと沢める。

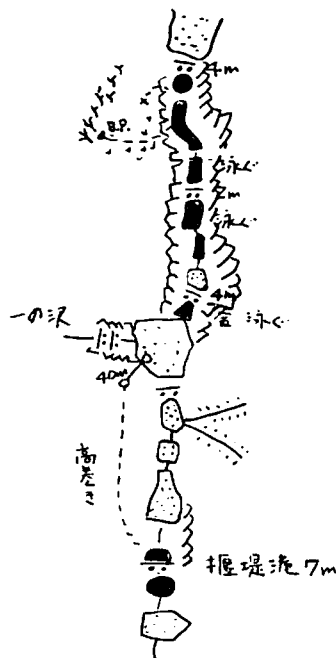
ニの沢に懸垂で下り、ゴ-ロのニ、沢をしぼらくたどり、左岸の尾根のあん部を越えて、反対側の本源沢へというわけである。ここまできると高巻まも攢れてしまい、めんどうもうな30m滝の上まで巻いて本流に下りた。た。大休止で絶品のラーメンで腹を満らす。あとは予想通りの緊迫感と失った(肉題のない)沢相と下り、倒木帯、いくつかの小滝、ゴ-ロと梳き、いつしか水も涸れたクボ状となり源頭となる。背後の山が望め高度の上がったことがわかる。最後のつめは、途中で左へ行くのが正解で右をつめていくと、池があつてきれいなのだが、登山道まごはヤブこぎとなるので注意。我々もこれにひかか、て引き返すハメとなつた。胎内尾根の登山道に出たところは草原状で、花も咲き気持ちよい。当然ここを泊まり!

8月15日 - 雨 -

小雨に打たれながら、胎内尾根をたどり、内内岳の主稜線にたどりつく頃は暴風雨という悪天であった。内内小屋でひと息つき、縦走するという奇藤、鈴木を残して、残りほ出発。飯豊らしき雨にけむる草原状の主稜線に感じながら、尾根をかす下り。しかし、つかのま、アヨの来襲、よくすべり道と、又んまん頭

に来ながら、や、とニマの思いで飯豊山荘にたどりついた。温泉とビールにありついたのでいうまでもない。

— 胎内川 核心部 —



浦島

8619
西朋祭と
ウォータークライミング
in 海沢

- ・ 8月30~31日
- ・ 飯塚(6) 林(6) 山野一家(19)
- 渡辺(21) 青谷(28) 遠藤(26)
- 中野(29) 河合(31) 東山(33)
- 荻田(34) 吉田(34) 西入(35)
- 加藤(35) 奇藤(38) 鈴木(38)

今回の西朋祭は、臨時総会と兼ねて例年通り氷川キャンプ場で行なった。しかし上方の参加者が少ないのは残念であった。これからほせひ8月の最終工・日はあけておいてほしいものだ。

また、まず臨時総会と銘打って西朋の会則を検討、承認あとは、おでんとニジマス(山野氏の収獲)と卯酒いろいろという豪華メニューで、交流となった。

- ・ 8月31日 - 晴 -
- ・ 青谷 河合 吉田 荻田
奇藤 鈴木

皆でうどんの朝飯と済ませ解散。去年に続いてウォータークライミング第2弾、海沢。車2台で下部瀑流帯の入口まで入る。去年の水根沢。そして夏の飯量と味をしめた我々は、あくまでも水線(中?)

突破。泳ぎ飛び込み とはしゃむまくる。特に鈴木君の意欲的なダイビングが光っていた。上部は、三ツ釜の滝、ネジレの滝と快調に直登し、大滝の手前で引き返す。



8621

恋ノ岐川-平が岳

- ・10月9日~12日
- ・河合秀樹 西入利雄
- 上野千良 斎藤大助

10月9日

夜の10時頃東京を經由肉越
ととぼす河合氏のメレリユ-
トは、小出インターを降り、
恋ノ岐橋で着いたのが午前1
時半すぎ。なんと3時間半で
着いてしまう。車に縁の深い
松にと、ては あらためて。
アフロ-ケとしての車の重要
さ、便利さを思い知らされた。

10月10日

恋ノ岐橋 7:40 - 8:00 湖
行開始点 - 8:55 5m 滝前
- 10:00 4m ジルジュ - 11:30
連瀑上(Lunch) - 12:55 初
沢出合 - 13:55 R - 15:05
R - 16:20 Δ (10m 枝沢前)

仮眠から目覚め、寝不足の
まま出発。始めは高巻を直と
行くが、すぐ河原に落ちして
しまう。早速わらじに履き替
える。朝の日差しが紅葉を一層
映えわたらせている。河の水
で顔を洗い、気分爽快で出発。
しばらくは小ツメや小滝が間
を隔てて現われてくる。落ち
口がビーカーの口のような滝
が多い。オホコ沢を左に分け
ると流れは一層せまくなり、

連瀑帯がつつく。途中、深い釜
をも、たコルジュが現れ、高巻
まとしたが、これが大変なアル
バイトとは、た。下を見れば、
ほるが彼方に15m程はあろう滝
が見えたが、はたしてそのよう
な滝(この川にしては結構大き
な滝)はガイドに載、ていただ
ろうか? 夕方、あせりを感じて
右岸を少し登、た所にテ-ン場と
見つけるが、これがオホコ沢出
合を除いて、後にも先にもない
ものじあ、たため非常にラッキ
ーだ、た。

11月11日

発 7:40 - 8:10 40m ツメ - 9:10
枝線 - 9:50 玉子石 - 10:30
平が岳(L) - 11:20 テポ地 -
12:45 台倉清水 - 14:40 下台倉
沢 - 15:20 バス停 - 15:55 尾
瀬口 Δ 湖畔

朝の水は冷たい。今にも泣き
そうなお天気。いくつかの小ツメ
コルジュを越え、4m滝を越え
るとようやく40mツメが出現。
斜度が急なので、隙の草付をた
よりに登る。その後もう源頭
の雰囲気と適当な枝沢と尾根め
をたしてパテパテで登る。尾根に
荷物もテポして、玉子石経由、
平が岳行漫歩と雨の中遂行。平
頂上を寒いパン昼食。隣のパー
ティ-のウ-メンがうまそうだ
、た。テポ地に戻り、早々に下
山する。長い長い尾根道をくだ
る。あじう泊の猶予がある、
今日は奥只見湖畔で幕営。夜は

たま火と酒で疲れをいやす。

11月12日

夜 8:00 - 9:30 恋ノ岐橋

テニ場から林道を2時間程で、車の所へ戻る。そこで、事件が起こる。車の中に入れていた河合氏の現金が盗まれているのである。ドアを少しあけた形跡があった。という事で足代は他の3人をワリカン。帰りもとほして3時頃には家に着いた。

8622

頸城・真川・黒沢

・10月18日

・西入利雄 (単独)

昨年秋に妙高、火打に登ろうとして雨で引き返したため、今回は紅葉の中を黒沢池まで溯行して再び登頂しようとした。ところが、前日の冬型の気圧配置による季節はそれの大雪のため、一面の銀世界。それでも思いま、冷たい水流の中へ足をふみ入れるも、手足がしびれてくるし、雲行きも怪しくな、てまたのど、20分ほど進んでのち、あえなく撤退。登山道を高谷池へ向かう。今シーズンの沢登りとしめくくろにはいまたかなまけたい幕切れた、た。



8624
南会津、セツ岳、
平滑沢

- ・ 10月26日
- ・ 西入利雄 他1名

会津鬼怒川線(野岩鉄道)の南通で、ぐうとアローチが便利になり、たので、紅葉の南会津をのんびり訪れてきた。セツ岳周辺は西上州の雰囲気似ていて、錦をまと、た名峰群がピョコピョコと顔を見せていた。

登路に採、た平滑沢コースは一般道にもなっていて、運動靴でも何とか大丈夫だった。上州二子山を思わせるセツ岳頂上からは、はや白い会津駒や大滝、那須から磐梯方面と新鮮な展望だった。

この南会津という山域は、もともと人跡が薄いたけに案外おもしろいところがあるかもしれない。

8626
河原小場沢

- ・ 12月29~30日
- ・ 青谷知己、山田裕久、斎藤大助

今年はみんなの都合があわず、冬合宿は、燕岳・スキー;そしてこの氷瀑登りと3つに分かれることとなった。

12月29日

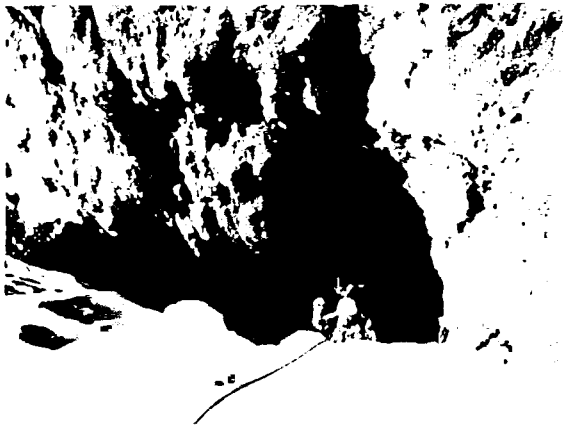
タウシーと三井の森で降りて歩き出す。林道が沢を横切って少したどり、南に向まを交える所から入谷。しばらく氷の流れる沢をたどる。2m位の小滝にぶつかると、釜は氷っていない。この上の側壁に3m位の氷がかかっている。やがてズルズルとなり中にいくつ小滝がある。どれも完全に氷で凍らず、氷の裏を氷が流れている。時折打ち抜きじやんとする。やがて大滝、左側の側壁がおおいおおいおびえるよう。一部氷の裏を氷が流れているが、大方氷っていて素晴らしい氷登り。青谷さんトップ・40mいっばいで超える。

もうほとんど流れの出ている氷をたどると南東からかけた沢の入り所で沢は左に曲がり、二段15m滝。快適に超える。このあとには小さな滝もあるが、全くと埋まっていて内題ない。ラッセルもたいたことはなく、連続下150m位の

樹林の中にサイト。

12月30日

たぐたぐつめて天狗西尾根
P2の少し西に出る。釜の湯に
下山。



河原小堀沢 ショ-2ダル

帰着、まだ12時であつた。

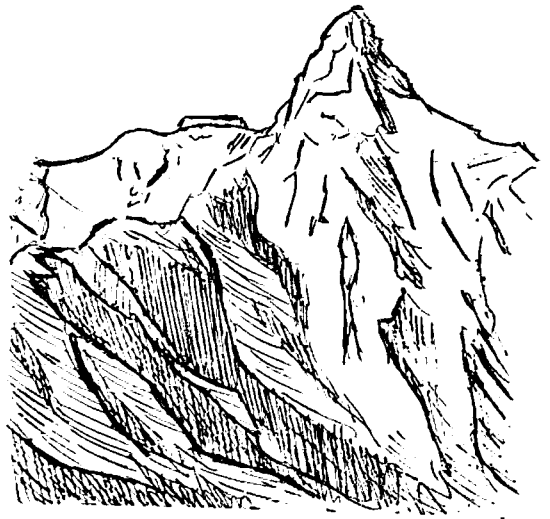
8623

妙義・桶木沢

・10月19日
・青谷知己

熊谷での友人の結婚式を終えて、ザックと多くの荷物を持、横川駅に到着。明日は久々の大人数が集合するはずで、妙義の沢の集中地と意気込んでいた。しかし何と、夜も12時すぎになつて、車が途中でぶつこわれた（誰のせしょう？）という連絡。このまま帰るのは何ともわけしい。というわけで駅舎で仮泊。駅から近い桶木沢を一人で登ることにした。妙義湖まで40分程。たどる桶木沢はかん木帯のゴロ沢。どこで右股を分けにかもわからず、チョイと沢らしくなつたと思つたのもつかぬま、（2つ程流はあつたが……）大まな涸滝を最後に源頭。しばらくで尾根上の道に出た。奇妙な岩峰、丁須岩が頭上にある。一般道はけ、この鎖場。丁須岩から一本垂れ下がる鎖は宙に浮いてあり、この登りが何といつても一番緊張をせられた。

表妙義や西上州の山々。浅間山と背後に見このんがりした時とつす。鍵沢沿いの道もかけ下り、気になつていた麻茅、滝に寄つてから横川に



8632
上州武尊
スキーツアー

- ・ 3月3日～5日
- ・ 西入利雄 他1名

そろそろ天気も雪も落ち着いてきたであろうということで、武尊～笠～至仏というロングツアーの計画を立て、勇躍のリンだ。

3月3日

宝台樹スキー場 9:10 -

14:00 奈倉沢源頭 14:15 -

17:20 1692m ロック - 18:10

予小屋沢 ぶ 就 23:00

宝台樹スキー場の上部でラッセルが途切れ、いまはリムおまでの猛ラッセルになる。水上駅の積雪をみて、これはマズイと思、たとわりにな、てしまう。林道なのに新雪にはほまれ、おまけにはか、晴れではやくもアゴが上が、てしまう。

予定より大幅におくれて奈倉沢の源頭。ここから校線までの150mの登高は実に辛かった。夕方にな、てようやく校線にでるも、予小屋沢のコルにあるはずの避難小屋がみつからぬ。体はクタクタだし、すでにどっぴり暮れてしま、たので仕方なくノロノロと沢状

のところで暮らす。計画では沖武尊をこえて牧場小屋のはずが、こんな具合では先を気にしつつか寝。

3月4日

発 - 10:00 1950m上の

二股 - 11:55 沖武尊 13:00

- 15:50 牧場分岐の避難

小屋 ぶ 就 24:00

とにかくしばらくは進んでみるということでお発する。すぐに雪に埋もれた小屋を発見。これではまのうにどりついても使えぬか、たたろう。予小屋沢は意外と雪がしま、ていて、結構いいペースで高度を稼ぐ。最後の二股で北西にのびる尻尾根にトリつま、あ、マリ頂上へ。沖武尊は独立峰にけに風が強いものの、パノラマは絶景。それにしても笠、至仏は遠い。

1時間もくつろいで、シールを付けたまま下りにかかる。中ノ岳北面のトラバースは思、たほど悪くなく、1900m付近で広い尻尾根の裏道に合流。あとは雪庇に気をつけながら小マなアッポダウンをくり返すうち、ぼ、たり登山者に出会う。牧場から予真ととりに上が、てまたが、雲行マが良くないので引き返すとのこと。まもなく雪に半分埋まった避難小屋を探しあて、今日の下山と放棄する。

3月5日

巻 P:25-10:40 武尊牧場

スキー場 バス停

昨夜夕方から飲み続け、すっかり二日酔いそのままトレースをたどる。初日はどうなるんのかなと思、たが、何とか武尊モンえられて良かった。



8633

根子岳ツア-

・3月8日

・西入利雄 他3名

締切したため登り出したのがはや昼すぎ。避難小屋まで登るとか人が抜け、上信や北アの展望がすばらしく開ける。ランケをとりながら十分満足してくつろぎ、雲も出て来たし、帰りの車の足も気にならぬので、頂上ロストンまで、マリアめらめて引返す。菅平のダボスケレンテで少し遊んでいるうちに夕陽を浴びた四阿根子が立派に見えてくる。今度こそ。それにしてもヘリ・スキー（根子山頂までヘリコプターで一気に上、スケレンテへ滑る）の連中は我々スキー屋にと、こぼしゃくであった。

8627

正月山行 燕岳

- ・ 12月31日 ~ 1月4日
- ・ 加藤彰彦 (CL)
- 上野午良 鈴木 亨

12月31日

新宿 ~~——~~

11時40分新宿発。総車道前までメンバーがもうわなくてひやひやしたが無事出発。

1月1日

~~——~~ 有明 = ケート

一中房温泉 - 合戦小屋(幕)

有明で下車。ケートまでタクシーで行き、そこから中房温泉へ向かう。久々の山行の自分にと、10kmの林道歩きはなかなかたえる。温泉でひたすけしたあといよいよ合戦尾根の登りにかかる。天気はまあまあだ。雪は思ってたより少なく、またトレースも小柄なためられていたので、よかった。でもやっぱり寒い。気持ちよきかけぬりてくる下山者をうらめしうにはがめながら、あえむあえむ登る。それでもなんとか合戦小屋に登りつめた。今日はここで幕営。

1月2日

合戦小屋 - 燕山荘(幕)

(一燕岳往復)

(その1)

3時半起床。早々に撤収して稜線へ向かう。すぐに森林限界を起える。とてもすがすがしい。大天井へのびる表銀座の稜線の間にのぞく槍の穂を仰ぎつつ登るとすぐに燕山荘に到着する。燕山荘に荷を置いて燕岳と往復する。しかし、残念なことに天候がいまいちで何も見えなかった。燕山荘に宿、て幕営。風はあまりないが雪はけ、こうふいていす。明日の天気と今後の行程を案じつつ眠りについた。

(その2)

たまたま起こされて目が覚める。が起きあがりうと思、こも起きあがれない。ほんとテントに積も、に雪が自分の頭を押しつぶしていたのだ。時間は午後9時半。もう眠るどころではない。3人で交代しつつテントのまわりの雪をどけにかかす。小屋の雪かきスコップがもほにあ、て本当にラッキーだ。た。スコップがほか、たらどうな、ていたたう。テントの中では、コンロをたいておはひをわかかえて座、ている。テントはまわりから雪に押しつぶされてる人すわりのがや、とという狭さである。雪をどけるそのわきからテントは雪に埋ま、ていく。さらにはスコップの角でありた穴から雪がテント内に入、てくる。午前3時、テントをすてて小屋への退避を決める。必要最小限の荷物を持ち小屋へ逃げこんで

や、とひといいついた。

1月3日

燕山荘—中房温泉(帯)

夜が明けてくる。明おくなるのを待って外へ出てみると驚いたことに天候は回復している。縦走の計画を中止して今日下山する事はすでに決めていたが、テントの救出に失敗した。テントを張ったのはふまにまりらしく、ベンチレーターの辺まで雪に埋まっている。ほんとかテントを埋り出したが、ポールは折れ、大穴が何ヶ所もあいていた。不幸中の幸いというべきが、

表銀座から槍、そして裏銀座へと続く素晴らしい展望と満喫したあとは下山するだけ。中房にボロボロのテントを張り温泉で汗を流した。

1月4日

中房温泉—有明(解散)

温泉からまたまた長い林道を歩く。時間があったのでさらに2時間半かけて有明の駅まで歩き、長かったあの夜のこじと思いうかべつつ帰途についた。



燕岳

60~61年度を振り返って

(会務報告にかえて)

C.L. 青谷知己

〈山行〉

この2年間の山行形態の特徴は、夏の沢登り、冬のスノーという形が定着してきたことであろう。数年前には盛んに行っていた谷川岳の岩場や、剣・穂高の名前は消え、東北や関東周辺の比較的地味な山に目が向いている。この傾向は今の登山界にも共通らしい。より厳しい探求的な山行は敬遠されつつある。某新聞にも出ていたが、「命をかけても…」というのは、はやらない。既に未知のルートが登りつくされた今、自分たちなりの満足感を求めて山に入っていくことになるのだろう。

西朋に入ってくる学生会員も、岩場の何々ルートを登りたいというよりも、より自然の豊かな人の行かない山を好むものが多くなった。今の社会人世代が、ひと通りの岩登りを終え、潤いのある山に目が向いてきた状況と、若い連中との好みが不思議とマッチして、今の山行形態が維持されているように思う。

5月山行は、リーダー層の強い好みが出て東北のスノーとなった。雪割を兼ねての山行だが、連休の東北の山は可憐らしく、しばらく続きそうである。ただ新人には突然のスノーで

あり、技術レベルの違いを埋める点で課題がある。

8月の合宿では、朝日と飯豊の谷に入った。困難度の高い谷であったが、泳ぎを交えた大きな谷の溯行は爽快なものがあった。ス、カタディアンロックでのスノーも、西朋ではタタの海外であり、短期間の海外の山の可能性をみいどすことができた。

正月の合宿では、定着氷登りの形態が数年経っており、60年度は学王層を中心として甲斐駒で行われたが、別途報告にあるように滑落事故をみこし、世代交代の矢先であっただけに、残念な結果に終りてしまった。

その反動のため、冬期の山行は低調のままに終始した。一方61年度は、燕岳～蝶ヶ岳の縦走が企画されたが、荒天のため途中敗退となり、ている。単発的に氷登りやスノーが行われているが、会全体としての冬季山行のレベルは上が、ておらず、先に述べた最近の風潮と考えあわせても、冬季の山行の充実に大きな課題と言えるだろう。

会としてのもともちりある山行は、以上5月・8月・正月の合宿であり、その間をつなぐ山行は、個人的な企画のもと、例年に計画・報告されたものである。学生リーダーの西入の活躍は目を見張るものがあるが、それに続く者が、かなり水をあけられており、一層の取組みを期待し

たい。

〈組織関係〉

西朋祭が久々に行われ、定着して来た。8月の最終土・日、水川キャンプ場で行われている。翌日は奥乃磨の沢でウォータークライミングというパターンである。参加者が少なく、盛り上りにもう一歩欠けるだけに、各世代が同期の連中に声をかけあって、年に一度の西朋祭に集まってもらいたいと思う。

又、甲斐駒の事故を教訓として、日山協の保険加入を義務づけることにした。(日常山行を行っている者に対して)。このために、都岳連の新規加入を行った。加入に先立ち、西朋会則も新たに作り、8月の臨時総会において決定・承認した。それなりの負担が増えることになるが、懸案であった保険加入が一応整備されたことは、今後のためにも好ましい。山行計画書等もあいまいであったが、これからはきちんとリーダーに届出ることを義務としたい。

次に会則にも検討されたが、会員の整理について考えたい。現在西朋会員は、特別会員、そして一般会員は1期から今年新人の39期まで100人をこえている。この中で現在山行を行っている者は、多く見積っても20人程度であり、くは現役を引退している。又、通信等を送付しても、応答があるのはせい

半数程度であり、会費の回収も滞っている。遭難時の寄付や、数年分の一括納入などを考えると、一概に会員整理をするわけにもいかないが、西朋登高会が同窓会ではなく、社会人山岳会としての活動体として運営されていくものとすれば、おのずと区分が必要になってくるのではないだろうか。一応会則にはOB会員の設定を盛り込んでみるが、検討をお願いしたい。又、既に40期という大きな世代の広がりがあるので、10期毎ぐらいの連絡体制や、幹事が必要になっていると思われるが、どうであろうか、あわせて考えてみたい。

〈会務〉

- ・例会…毎月第2火曜7:30～新宿カトリアにて。集まりは必ずしもよくない。
- ・会報
 - ・西朋通信、各年1回・6月に発送
 - ・甲斐駒事故報告(61.2)
 - ・西朋会則(61.8)
 - ・60～61山行を中心に西朋23を発行する。

都立西高W.V部活動報告

1985年度

山行名	期日	場所	参加者				
			3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎会	4/21	鷹ノ巣山	5	4	2	不明	不明
5月月例山行	5/11~12	乾徳山~黒念山		4	5	2	1 (西入)
6月月例山行	6/29~30	塔岳~蛭ヶ岳~車野	2	4	4	2	2 (吉田・西入)
夏山合宿	7/21~27	白馬岳~爺ヶ岳		4	4	2	2 (加藤・相澤(西入))
沢登り	9/21~23	奥秩父・東沢・又保保		4	2		2 (青谷・加藤)
11月月例山行	11/2~24	白毛門		3	1		2 (西入・萩田)
スキ-合宿	12/25~30	乗鞍高原温泉対一場		4	3		1 (上野/萩田)
1月月例山行	1/25~26	編笠山		4	3		1 (西入)
2月月例山行	2/2~23	水塔山~竜ヶ岳		4	2		2 (松本(西入))
春山合宿	3/25~30	下ノ峰・仙ノ岳(7回)		4	3		2 (相沢・萩田(西入))

1986年度

山行名	期日	場所	参加者				
			3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎山行	4/27	三頭山	2	3	4	4	3 (林・香藤・鈴木)
5月月例山行	5/17~18	雲取山		3	4	2	2 (香藤・萩田)
6月月例山行	6/28~29	川沢三峰		2	3	2	2 (上野・鈴木)
夏山合宿	7/20~26	栗駒岳~倉岳		3	2	3	3 (武内・藤原・藤)
沢登り	9/13~15	巻機山・米沢割引沢		2	3		2 (西入・萩田)
11月月例山行	11/1~3	赤岳・碓氷岳		2	3		2 (加藤・香藤)
スキ-合宿	12/25~30	鷲頂山スキ-場		2	4		1 (上野)
1月月例山行	1/4~25	天狗岳		2	4		2 (西入・上野)
2月月例山行	2/28~3/1	湯成山~烏帽子岳		3	2		2 (青谷・西入)
春山合宿	3/25~30	上河内岳~光岳		3	3		2 (山田・萩田)

(注) 表で(/)は途中交代を示す。

(注) 上記の山行の他、高校生有志による個人山行も多数あるが割愛した。

1985年度部員数

	1年	2年	3年	計
男	3	4	3	10
女	0	0	2	2
計	3	4	5	12

1986年度部員数

	1年	2年	3年	計
男	3	3	4	10
女	0	0	0	0
計	3	3	4	10

2年間に亘り、例年どおりの形態の山行が実施された。

今回記録をふり返って見てみると気付いたことは、高校生の不参加者が多いことである。各人いろいろと都合・体調の悪い場合等あるかとは思いますが、普段のトレーニングと、その成果としての充実した山行という、高校生のクラブ活動にふさわしい積極的な参加を望みたいものである。そして我々西朋も、それを全面的にバックアップするべく、指導体制をさらに確立していくつもりである。

荻田・記 (34期)

初めての春山合宿より
林 武志

私が初めて西朋の山行に参加したのは、昭和30年3月のハヤ岳行者小屋合宿であった。一年浪人して全く山に行かないで、しかも、二期の試験の終った夜、何の準備もなく、西高の春山合宿(甲ア・宝剣岳)へ参加した。一年生だけ4人の中に、臨時のリーダーとして引張りだされたものだった。この一年生の中には、松田稔がいた。

西高の春山は無事終り、草野駅で解散し、駅前の旅館に一泊して、西朋の春山に参加した。早朝、本隊に合流し、バスでハヤ岳農場まで行き、そこから行者小屋へ向かって単調な道を、重い荷物に潰されそうになりながら歩く。新入会員は私の外、町田明さん、松田朝夫さんであった。鈴木輝夫さんも新人並みに苦しんでいた。

この日は私にとっては今迄に経験したことのない程の苦しみだった。大学受験のため、約一年半山に入っていたが、全く運動をしていなかったから、身体が全くなまっていたのだった。“もうだめだ。歩けない。”見栄も外聞も忘れて、ひっくり返りたいと思ったことが数え切れない。その都度“頑張れ!!”と平沢がどなる。一瞬どくりとするが、それはいずれも他の新

人に対するの気合いであった。新人の皆様のお陰で、ボロを出さずにどうやら、こうやら行者小屋へたどり着き、ホッとした。その後の山行でも気合を入れることはあっても、入れられること無く過ごせたのは、大変に幸運であったとしみじみ思う。

この春山では、雪崩に遭った。私の唯一度の体験であった。その日は朝から気温が高く、小屋の軒からボロボロ水が落ちていた。何か変な予感をしながら出発した。私は田中実さんリーダーに、町田さんと3人で、阿弥陀岳へ向かった。沢の中を登るが、良い気持のものではない。稜線へ出た時はホッとした。阿弥陀岳頂上を往復し、同じ沢を下った。先頭に田中実さん、次が町田さん、いずれもコンパスが長い。私はラストについていく。膝位置でもぐる。周囲はガスが厚く見通しはよくなく、次才に早足になる。私はコンパスが短いのでトレスを造るのに必死だった。誰かが呼ぶ声がする。田中將利さんの声だ。後で判ったのだが、雪崩の心配が高くなったので、途中で引き返して、我々を迎えに来たのだった。どうやら田中將利さんの顔が見えるところまで来たとき、雪崩だ。逃げろ!!”と將利さんが怒鳴った。必死で側部へ数十歩跳ね上がった。コンパスもなにもかも忘れて、振り返ると、濃いガスの下から、無気味な、化物の

舌のような、雪崩の端末が、音も無く下って、私の居た所まで来て止った。何とも云えない気持ちだ。立ちすくんだが、このままでは危険なので、早く離れたいと気ばかりあせる。無事に小屋へ戻ったときは、思わず良かったと、やっと笑顔になった。ハッ缶で雪崩に遭うとは予想していなかったが、雪崩は、急斜面に雪が積っていれば、何時でも、何処でも起きると思わなければならぬと実感し、その後の山行には大変有益だった。

この話は、もう32年も前のことであるが、今でも昨日のこゝのように残っている。



甲斐駒ヶ岳戸台川双児沢滑落事故報告

昭和61年1月

西朋登高会 C.L. 青谷知己

1. 山行計画

西朋では毎年正月前後に合宿を行っているが、その形式はその時々のメンバー構成によって、縦走主体のものからバリエーションルートまで様々であるが、ここ数年は、定着およびバリエーションルートのアタックという形式がとられている。八ヶ岳西面東面南面とほぼトレースを終えたところで、今年は新たな候補地として、甲斐駒周辺が早くからあがっていた。西朋では、1987年度に鋸甲斐駒摩利支天の登攀、戸台川本谷をトレースしているが、世代も交代し、学生を中心に鋸の縦走に強い希望が出されていた。これに氷瀑登りをプラスしたいというものである。

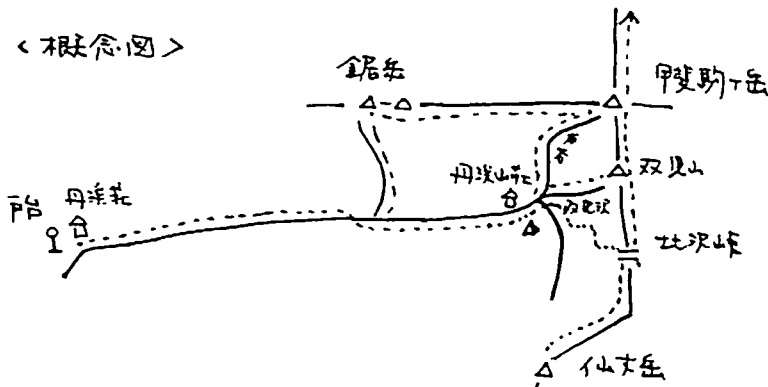
スケールは一段アップするが、八ヶ岳周辺をひととおり登り終えて、一人立ちするには最適であろうと思われた。

構成メンバーは、日程の都合で、12月28日～31日に社会人2名（遠藤[26]、青谷[28]）が中ア小野川正股沢に入り、正月にはいって学生を中心に合宿が組まれた。計画は以下の通りであった。

C.L. 吉田[34] S.L. 山田[34]

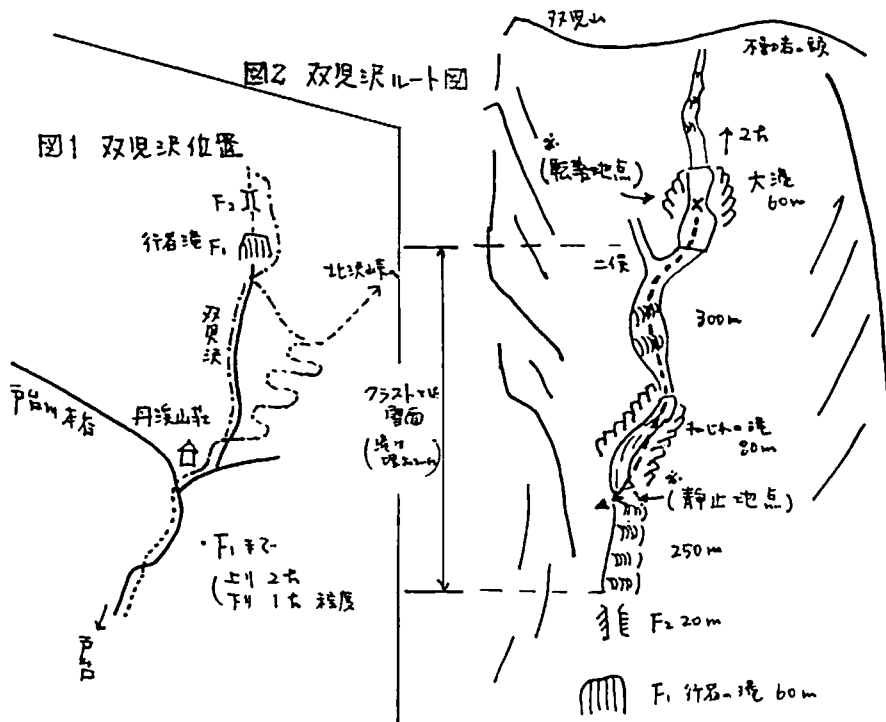
- | | | |
|------|---------------------------------|-----------------------|
| 1月1日 | 戸台より入山
(吉田・山田・浜田[34]・上野[37]) | |
| 2日 | 戸台川本谷 | 入山
(西入[35]・加藤[35]) |
| 3日 | 双児沢 | 仙丈岳アタック 入山(相沢[37]) |
| 4日 | 下山(吉田) | |
| 5日 | 鋸岳角兵衛沢～甲斐駒～黒戸尾根 | |
| 6日 | | |
| 7日 | 予備日 | |

ベース地：丹波山荘前河原、3日に全員集合し、鋸の縦走へ出発。



2. 行動記録

1/1	(吉田・浜田・山田・上野) 7:00 戸台 10:00 丹溪山荘 (吉田・浜田) 13:00 発 14:30 双児沢 F ₁ 下 (ピバーク)	(山田・上野) 本谷周辺で水遊び (丹溪山荘前テント泊)	
1/2	以下別掲	西入・加藤合流後周辺散策 (同泊)	(西入・加藤) 6:30 戸台 10:30 丹溪山荘 12:30 発 15:00 北沢峠 (泊)
1/3		6:00 救助隊と合流 (予定 鋸岳第一高点アタック)	6:00 発 10:00 仙丈岳 12:00 北沢峠 14:20 丹溪山荘
1/4		下山	下山



3. 事故経過

- 1/2 7:00 起床
9:00 発 (F₁下)
10:00~11:00 F₂
13:00 大滝下着 (先行パーティ待)
15:00 頃 大滝 2P 目で吉田転落、浜田も引きずられ転落ねじれの滝下まで約 400m 滑落
15:30 頃 神戸 2 人パーティ (松岡・三浦氏) および下から登ってきた蒼氷 1 名 (中嶋氏)、2 人の静止場所に合流、F₂上まで 2 人をおろす。
中嶋氏丹溪山荘に連絡に下る。
17:00 頃 丹溪山荘へ一報、中嶋氏トランシーバーを持って再度現場へ。
18:30 頃 救助隊正式要請 (F₂上平坦地にてビパーク)
- 1/3 5:00 頃~ 交信
9:30 救助隊と合流
以下救助経過へ

4. 救助経過

- 1/2 17:05 丹溪山荘へ事故一報
19:30 頃 吉田宅へ第一報 (伊那警察より)
19:40 青谷宅へ連絡
渡邊宅へ連絡吉田(父)と連絡
イ. 先発として渡邊[21], 青谷[28], 吉田(父)出発決定
ロ. 連絡先山本(泉)[20]宅に設置
ハ. 学生諸会員に連絡、待機体制を指示
- 20:30 頃 吉田宅へ集合、関係方面へ連絡
22:15 第一陣出発
23:00 すぎ 第二陣出発 (川田[12], 上遠野[17], 萩田[34])
- 1/3 2:30 伊那警察着...事情説明打ち合せ
3:10 長谷役場着...地元遭対協メンバーと合流
4:00 頃 戸台丹溪荘着 (吉田(父)残る)
6:15 丹溪山荘着...山田上野合流
体制打ち合せ...新潟山岳会小島氏をリーダーとする。
9:15 頃 双児沢 F₁下着
9:45 頃 現場到着 (第二陣着頃)
救助体制、搬出にはいる
13:00 頃 F₁下よりヘリコプターで搬出、伊那中央病院へ
現場にて挨拶、装備確認

- 14:30 頃 丹溪山荘へ帰着...挨拶等
- 16:30 頃 丹溪山荘着.....挨拶等
- 17:30 頃 伊那警察着.....挨拶, 総括
浜田合流
- 18:00 頃 伊那中央病院へ
吉田・浜田帰京吉田中野総合病院へ入院
- 22:00 頃 東京帰着

-怪我の状況-

吉田:右足首脱臼骨折(全治2カ月)等

浜田:打撲擦傷等

-救助協力-

新潟山岳会 6名+α

神戸青竹山岳会 2名

蒼氷 1名

南ア北部遭対協 6名+α

伊那警察現地 2名;前進 2名

丹溪山荘

および西朋 7名

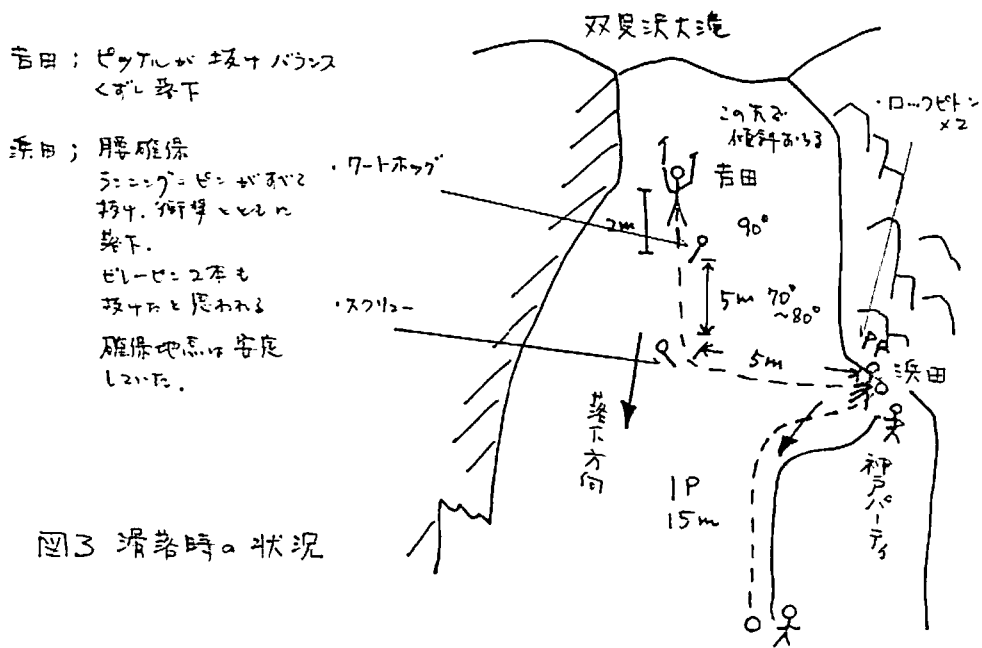


図3 滑落時の状況

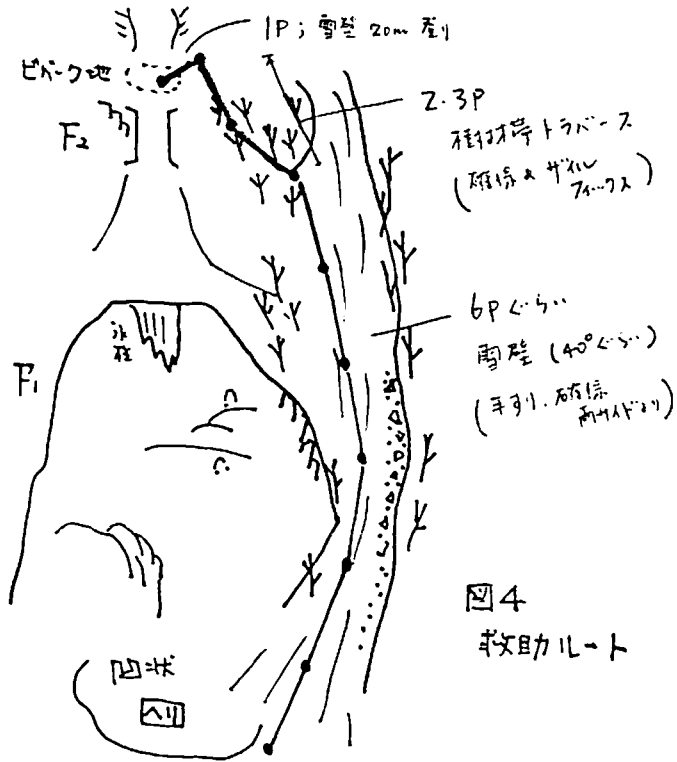


図4
 救助ルート



事故直前の吉田

5.総括および課題

事故そのものは、氷瀑登攀中の転落に伴う滑落であった。この時期、今年は気温の変動が激しく、氷質が著しく悪かった。また、谷筋の以外に多い積雪など悪条件であったことがその事故の遠因としてあげられよう。ルートを選択については、今最もものっている時期の彼らにしてみれば、実力以上であったとはいえない。ただ、大滝での先行者がたびたび落下し、氷質の悪さや傾斜の強さが冷静に判断されれば、まいてしまうこともできたはずだ。ただ、双児沢においてF₂のみしか氷のでていない状況を考えると、まくのはさらに勇気のいることかもしれない。

次になぜピトンがすべて抜けたかである。氷瀑登攀中にトップが落ちることは往々にして起きることであり、ピトンのきき具合が問題になる。状況を聞く限りビレーの体制に大きな失点はなく、ビレーピンのチェック、アイスピトンの選択およびトップの落下に伴う衝撃がすぐビレーに伝わった点などに問題点が求められ、それらの判断が日頃から十二分に経験として積まれていたかという点、心許ないものを感じる点もある。

何はともあれ、距離にして400m余の滑落をしたにしては、命に別状のなかったことは不幸中の幸いであり、さらに一緒にビパークして連絡をとってくれた3名の方々の世話があったことも好運であった。また、救助に関しても、新潟山岳会をはじめとするスピーディーな協力体制で、現場についてから数時間のうちに下界へおろせたことも、天気が良かったことも含めて恵まれていた。我々西朋のメンバーのみでは、物資も人数も不足していただけに、様々な協力に対し深く感謝したいと思う。

なお、今後の課題として、合宿山行の準備体制の再チェック、集中山行での連絡のとり方、応急処置・救助法の修得、山岳保険への加入検討等があげられている。

西朋登高会会則

第1章 名称・目的

- 第1条 本会は「西朋登高会」と称する。
- 第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実戦すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。
- 第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

第2章 組織・会員

- 第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。
- 第5条 本会には次の役員をおく。
1. 会長..... 会を代表し、事務局をおく。
 2. チーフリーダー... 山行全体を掌握する。
 3. 学生リーダー.... 学生を中心とした山行を掌握する。
 4. 会計..... 財政を管理する。
 5. 装備..... 共同装備を管理する。
 6. 記録..... 山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
 7. 西高係..... 西高ワンダーフォーゲル部を指導する。
- 第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。
- 第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。
- 第8条 総会では、次のことを議事とする。
1. 前年度活動報告
 2. 前年度会計報告
 3. 新年度役員選出
 4. 新年度活動計画
 5. 新年度予算案
 6. 新会員承認
 7. 会の運営に必要な事項
- 第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。

第10条 例会では、次のことを議事とする。

1. 山行報告
2. 山行計画
3. 会の運営に必要な事項

第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。

第12条 本会には次の会員を置く。

1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を勤め、本会に大いに貢献した先生
2. 一般会員...会の活動に関心を持ち、合宿山行や、総会例会西朋祭などに参加する会員。(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
3. OB 会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。(総会などの連絡のみ事務局より送付する)

第13条 前条のOB 会員について、次の場合、一般会員より移行する。

1. 本人の希望による。
2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB 会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

第3章 会費・会計

第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。

1. 一般会員...年額4000円
2. OB 会員...年額1000円(数年分前納できる)

第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。

第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。

第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。

第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。

第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実戦できるように、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

第7章 遭難対策

第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難対策基金は、当座必要な費用の立替に使う。

第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

第9章 施行

第37条 この会則は、1986年8月30日の臨時総会で決定し、9月1日より施行する。

-編集後記-

西朋22を発行してから早いもので3年もたってしまいました。22号のあとがきに毎年発行したいなどといっておきながら、随分と時間がかかってしまいました。これは一重に私の怠慢です。

かくいう私も19年におよぶ学生生活に終止符をうち、今年いよいよ社会にでます。これまでとは生活のパターンも変わっていくことでしょう。必然的に山に対する接し方も変えなければならぬかも知れません。それでも変わったら変わったなりに山とつながりを持ち続けていきたい、そんなふうに思っています。

最後に、本会報の発行にあたり、清書に多大な労力を提供してくれた鈴木学君と松原美佳子さん、そして、素晴らしいイラストを描いてくれた高橋寛和君に感謝します。

1989年3月 山田裕久

西朋23

1989年3月発行

発行者 西朋登高会 (会長 渡邊喜仁)

発行所 東京都杉並区阿佐ヶ谷北5-9-13
渡邊喜仁付 西朋登高会

編集者 鈴木学, 山田裕久

印刷所 東大出版会